ISSN 0387-284 X

読書科学

第43巻 第2号（通巻 第 168 号）平成11年7月1日 発 行（季刊）

原著
教育雑誌に見る明治後期中学校
国語科教育における文学教育論 浮田真弓
速読訓練の効果に関する検討 山本哲也
佐藤泰正
桐原宏行
カタカナ4文字語を構成するカタカナ
バイグラム頻度表（II） 川上正浩
翻訳
読みについて(3) ケン・グッドマン
横田玲子（訳）

168

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原著

教育雑誌に見る明治後期中学校国語科教育における文学教育論

桜花学園大学　浮　田　真　弓　43

速読訓練の効果に関する検討

つくば国際大学　山　本　哲　也

つくば国際大学　佐　藤　泰　正

つくば国際大学　桐　原　宏　行　51

カタカナ4文字語を構成するカタカナバイグラム頻度表（Ⅱ）

名古屋大学　川　上　正　浩　56

翻訳

読みについて(3)

アリゾナ大学　ケン・グッドマン

加藤学園暁秀初等学校　横田玲子（訳）　66

日本読書学会役員（1999年4月1日～2003年3月31日）

会　長（理事長）	桑原　隆				
副会長（副理事長）	鳴島　甫				
常任理事	内田　伸子	金子　守	阪本　敬彦	佐藤　泰正	塚田　泰彦
	徳田　克己	福沢　周亮			
理　事	有沢俊太郎	池田　進一	今井　靖親	倉澤　栄吉	首藤　久義
	高木　和子	田近　洵一	王岡賀津雄	塙　和明	増田　信一
	湊　吉正	村石　昭三	横山　範子		
監　事	岡田　明	桐原　宏行			
常任編集委員	鳴島　甫（編集委員長）				
	池田　進一	金子　守	阪本　敬彦	塚田　泰彦	徳田　克己
	James M. Furukawa		Donald A. Leton		
編集委員	有沢俊太郎	石原　敏道	今井　靖親	内田　伸子	江連　隆
	大城　宜武	大西　道雄	岡田　明	北尾　倫彦	小嶋　恵子
	後藤　惣一	小林　國雄	鹿内　信善	高木　和子	府川源一郎
	村井万里子	村石　昭三	望月　善次	山田　純	萬屋　秀雄

The Science of Reading, Vol. 43, No. 2 (1999)

教育雑誌に見る明治後期中学校国語科教育における文学教育論*

桜花学園大学　浮田真弓**

1．問題の所在

本論文の目的は1900年前後（明治33年前後）の教育雑誌を史料として中学校の文学教育論を整理し，当時の文学及び小説が教育世論の中でどのようにとらえられていたか，その諸相を明らかにするものである。後述するように，中等教育における国語及漢文科が当時，世論をまきこんだ教育問題として注目された一方で，法規上，文学が位置づけられる過程を明らかにする史料は限られている。先行研究では，教育関係の雑誌を史料とした研究に高橋（1992）がある。高橋によれば，文学は学生風紀問題を契機として教育的に有用であるとされるようになった。高橋は当時の文学観を儒者の文学観とし，新興の小説がおとしめられていたとしているが，これは当時の史料によって裏付けられているわけではない。当時の史料に基づいた文学観の検討が必要である。本論文では，教育における小説及び文学観を高橋が史料とした『教育時論』のみならず複数の教育雑誌を参照することで明らかにする。同時に高橋では，考察の対象となっていない教育法規の変化も参照する。

まず明治期中学校国語及漢文科の法規の流れを整理しておく。明治19年４月10日勅令第15号の中学校令において初めて「国語及漢文」科として，「国語」という教科名が示される。この中学校令についで明治19年６月22日文部省令第14号で尋常中学校ノ学科及其程度が定められ，第５条中「漢字交リ文及漢文ノ講読書取作文」とその内容が示されている。明治27年３月１日文部省令第７号において，「漢文ノ書取作文（中略）ヲ削ル」とされている。

明治34年の中学校令施行規則第１章学科及其程度第３条には「国語及漢文ハ普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓発ニ資スルヲ以テ要旨トス」と「文学」の文言が見える。制度的には初等教育と位置づけられた同年代の生徒がいる高等小学校に関する法規である明治33年の小学校令施行規則では「文学」の文言はない。一方，明治34年高等女学校令施行規則では，中学校同様「文学」の文言が出てくる。この時点で法規的に「文学」は中等普通教育の教育内容とされたのである。

先行研究によれば，中等教育とりわけ中学校の国語及漢文科は漢文科存廃問題に焦点づけられて論じられる傾向にある。漢文科存廃問題は1900年の高等教育会議において，文部省から諮問された中等教育の国語科の中で漢文を教授するとした案をきっかけとして，教育世論の中でもしばしば取り上げられた問題である(1)。その一方で，特に大きな事件がおこることなく，「文学」は法規の中に位置を占めたのである。

紅野（1996）は1900年前後を「その当時，中学校が校友会を主体とした雑誌を発行していくようになり，そこに投書欄が設けられていったことは，まさにわたしたち

---

* On theoretical approaches to the teaching of literature in high schools in the late Meiji Era : Based chiefly on data from contemporary educational magazines.

**UKIDA, Mayumi (Ohka Gakuen College)

が前提にしてきた「文学」の誕生を支える教育制度上の重要な布置といわざるをえない。」(2)と位置づける。つづけて,「ここでは東京帝国大学を中心とする高等教育機関よりもむしろ中等教育を重視する。それは近代の人間たちにとって趣味や美意識にかかわる「慣習的行動」の形成に関与する比重が高いのは高等教育よりも中等教育であるからだ。」(3)と指摘する。

以下では,文学の一ジャンルである小説と教育との関係,及び文学に関する言説を検討することから明治33年前後の中学校国語及漢文科における文学がどのように価値づけられていくか,その過程を明らかにする。史料の調査には『教育関係雑誌目次集成』を使用し,明治30年代までに発行されたものを調査対象とした(4)。

2.中学校国語科に関する記事

まず教育雑誌中,中学校国語科に関する記事によって,当時の中学校,その中でも国語科に関する具体的な記述から,中学校国語科が期待された役割を明らかにする。

明治27年の今泉定介による「中等教育に於ける国文科の程度」では,普通教育における国語科で雅文を教えることの無意味さを説いている(5)。「国語」は「普通文」となる方向にあり,文体の多種多様に存在する状況についてふれながら,「古言難字を避け,意味もなるべく平易流暢なる者ならざるべからず」と述べている。次に高等師範附属の中学科では,1年より3年は適当な作品を教えているが,4年以上で,古事記,枕草子,源氏物語を教えていることを批判している。続いて,今泉の管理する共立尋常中学での程度を示している。そこでは,読みの材料として,普通国文(今泉編の教科書),神皇正統記,方丈記,軍記体,徒然草,土佐日記,竹取物語があげられている。今泉は「文部省は国語を以て,教育の基本とせられ,国語は従来の古文に代ふるに,普通文を以てせられんとす」と述べており,上の作品群が教育の基本たる国語科に適したものであると述べている。

明治28年には「古文課全廃すべからず」(筆者不詳)として,「中学校が高等専門教育の予備たる性質を有する以上は,全く之を廃すべきにあらず」と述べられている(6)。これは,明治27年7月12日文部省令第16号高等学校修業年限及入学程度において,「高等学校入学ノ程度ハ尋常中学校卒業程度ニ依ル」として,高等学校に予科をおかず,直接的に尋常中学校と接続することになった点をふまえた見解であるが,その上で,「若し夫れ土佐日記,つれづれ草の如き古文は,今の中学校最下級の生徒に之を教授すべからざるは勿論なれども,(中略)中学校の四年五年等に在りては,是等クラシックスに属するものを與ふるとも,亦是必要なるべし。」と述べている。

ここでは,中等教育をうけた人間の教養として古典を教えるという立場を確認することができる。が,この時期,中古文の文法に部分的に従っている普通文が使用されている中で,中古文が「クラシックス」(=古典)と認識されていることがわかる。このような「クラシックス」が高等教育の準備である中等教育に,ふさわしい教養ととらえられている。

英語学者の岡倉由三郎はより直接的に,「国語国文の教授法に就きて」(7)において,学校段階ごとの国語教育について俗語文典の編集の必要性を主張したのち,次のように述べる。

「国語を修めたれば,美文か歴史かの参考になることはあらんも,さる方面に注意せざる人にとりては,あまりよき報酬なきやもしれず。然らば国文は作文の助けとなるか,今後の普通文は,益々俗語に近つかざるべからざるを以て,普通文修練の上にも,格別の助けとならず。然らば又智育上,徳育上の大思想を養ふ者あるか,国文に記する所,女の事にあらざれば坊主の事おほきことを如何せん。実に此三大目的の何れもを得られぬは,国文のため慨くべき事といふべし。然らば国文教育の主眼とすべきは,如何なる事なるべきか。之をして美育の一助とし,思想發表の好習練場たらしむるは勿論ながら,又我国古来の人情風俗を知り,我国に對する同情同感を養成する主要の一點にあり。」(8)

岡倉の発言は次のようにまとめることができる。新し

い知識を得るためには「国語」は限られた部分でしか，役に立たない。これまでの国文学作品は知育，徳育のどちらにも役立たず，作文にも役立たない。国文学作品を学ぶことは，日本古来の人情風俗を知ることによって，日本人としてのアイデンティティを持つことにある，とされている。岡倉が述べる「国文」は当時使用されていた「普通文」より前の文章を指している。ここでも，中学校の国語科での教養は古文である。岡倉は「万葉」「宣命の文」を教材にする読本を批判し，むずかしくても「土佐日記」どまりにすべきであると説く。

明治33年の「中学の国語科」(筆者不詳)(9)では，「生徒は国語読本を悉皆暗誦するも，普通の文章を作ること能はざるなり。(中略) 新聞紙の論説といへども，中学校の卒業生には難解の辞句多し。」と慨嘆し，読本の材料の「趣味的，出世間的，感情的，古代的」であることを指摘している。そして，「然れども，学生の学力の不足は，ただに読本教員の罪のみならず，国語の難渋もまた其の因を為すこと少からず国語調査は，潜心研究を値する急要の事業なり。」として，国語の不統一が，学習のさまたげになっていることを指摘する。

明治35年の「中学校の文学科」(筆者不詳)(10)では，「中学校における国語漢文課は，必らずしも厳密なる意義に於ての文学其物の学修にはあらざる如し，字義を繹ね意句を学び，思想表白の形式を覚ゆることの外に，彼等が専門の文学学校の生徒の如く，専ら文学的趣味好尚を討尋せむことは，由来国語漢文課の教課に数へられたる所以にあらず。」(11)と述べ，続いて文学そのものの教育は，普通教育の目的ではないと述べる。そして，名句名文の満ちた教科書を与えても，学生の能力の低さゆえにその趣味を理解できないと嘆く。中学校の国語及漢文科は，中等教育を受けた者としてふさわしい教養としての「古典」と，当時使われていた文章を読み，書くのに十分な学力とを望まれていたと言える。

以上，中学校の国語科の役割と読みの材料について見てきた。明治20年代には，読本の内容が現実社会に行われている国語と乖離していることが繰り返し述べられている。明治30年代に入ってからは，国語そのものの不統一が指摘される。

長 (1992) によれば，明治33年—34年は初等教育界において一種の教育運動ととらえられる言文一致運動がおこった時期である。中学校の読本教材の出典も，この時期を境に近代に成立した文章が増えてくる(12)。

中学校の国語科においては，文章の選択において，教養という基準と「普通文」に近づく国語という基準を満たすことが要求されていった。この基準は文章の内容と文体に対応すると考えられる。文体に限って言えば，さかのぼっても中古，それ以前は必要ないとされていることがわかる。

次章では，教養という基準に対応する内容，文学の教育的価値に関する議論を検討する。

3．文学の教育的価値をめぐって

(1) 小説の教育的価値に関する議論

文学に関する記事はまず批判から始まる。明治19年の村尾壹太郎による「小説稗史ノ濫出及改良ノ儀」である(13)。一般論として小説稗史が増えることを喜ばしい事とした上で，日本の小説稗史は奇怪幻魔について書くかまたは，色情について書かれているもので，女子供の淫奔さがあらたまらないのは，小説稗史に原因があるとしている。

「不完全ナル小説稗史ノ弊害ハ啻ニ道徳上ニ止マラズ多端ノ良民ヲシテ時間ト心力ヲ徒費セシメ有益書ノ多出多見ノ途ヲ妨グ等枚挙スベカラザレハ教育上ヨリ之ヲ安閑視スベカラズ」(14)と，小説稗史を放置すべきでないと説いている。小説稗史がどのような作品を指すのか定かではないが，道徳上の悪弊，中でも色情に関する悪影響が指摘されている(15)。

明治20年には関直彦が日本の小説を改良するべきであると講演し，いくつかの雑誌に採録される(16)。小説は「社会ノ教育上ニ関係カ有テ大ニ其利害ノ有ルコトト思ワレマス」。「小説ヲ利用スルコトヲ誤リマスト随分道徳ヲ破壊シテ仕舞フコトモ風俗ヲ紊乱スルコトモ出来ル是

ヲ害用スルトキハ甚ダ深イ害ガ出テ参リマスル夫故今日ノ小説中ニ是ハ害ガ有ルモノト認メタルトキハ之レヲ改良シナケレバナラヌモノト思ヒマス」。「日本今日ノ小説トテ美術ノ旨意ニ協ッタモノハナキテハナキカ随分不都合ナ者ガ流行シテ居ル」。「小説ノ極精良ナル高尚ナルモノカ果シテ出来タナラ間接ニ風俗ヲ改良スルコトモ出来道徳ノ腐敗ヲ防キ社会ヲ改良スルコトモ出来様ト思ヒマス」(17)。

学校教育の中での利用は考えられておらず，社会教育の中での利用がとなえられているが，現在のままでは道徳上の問題があるとここでも指摘されている。小説を高尚にすることによる社会の改良を提言している。

明治22年には「小説ト学生」（塵外散士）と題された記事が載る(18)。ここでは「小説ハ文学ノ一ニシテ，実ニ美術ノ範囲ニアル貴重ノモノナルベシト雖モ，然レドモ経済的ニ之ヲ見レバ，不製産的ノモノナリ」と，生産性につながらないものと小説を位置づける。

「専門ノ教育ハ素ヨリ設令普通ノ教育ト雖モ，国家ノ実益ニ有用ナル人民タラシメンコトヲ期スルモノニ外ナラズ。（中略）故ニ大学ナリ，中学ナリ，苟モ日本帝国ノ管理スル学校ニ於テハ，他日小説家タレトテ学生ヲ教授スルモノニアラズ。」(19)

「然ルニ予輩ノ聞ク所ヲモッテスルニ，現今有名ナル某々ノ小説家ノ如キ，某大学ノ生徒ナリシカ一度小説「マニア」ニ浮サルルヤ，其ノ身ノ将来ニ重任アル学生ナルヲモ打チ忘レテ，筆ヲ小説ニ染メ妄ニ之ヲ世ニ示セリ。世人ノ評判ハ案外ニ宣カリシガ為ニ，遂ニ小説家タラントノ謀反ヲ企テ，部長教頭ノ説諭モ猶ホ之ヲ聴カズシテ，半途ニシテ其ノ校ヲ辞シタリト云ウ。此ノ説ノ実否ハ之ヲ知ラズト雖モ，現ニ予輩ノ知レル一地方ノ高等中学ニアル学生ニシテ此ノ流亜ヲ真似ヌルモノカ，日課ハ怠リ勝チニテ小説ノ編輯ニ，幾ント心身ヲ委子タルガ如キモノアルヲミルナリ。」(20)

現在著名な小説家は大学生のころ小説を書き始め，とうとう学問半ばにして大学をやめてしまった。この真実かどうかわからない風評をきいて，高等中学生が学業をおろそかにして，小説を書くようになってしまった。ここでは，学業と対立するものとして，小説を読んだり書いたりする行為が示されている。もっぱら，小説は道徳上好ましくなく，また学業のさわりになるものとして批判されている。ここでは，文学は学校教育とは相いれないものとして位置づけられている。

(2) 教育的価値を肯定する論

その一方で明治22年に菊地熊太郎が「教育上小説ノ価値ヲ論ズ」という積極的な小説の教育での利用法を説く記事を書いている(21)。

「蓋此ノ輩ニ適スルモノハ理想的ノ小説ナルベシ，即実際ノ事実ニ遠ザカルモ，智識品行間然スル所ナキ主人公ヲ有スル純粋意匠的ノ小説ヲ宣シトスベシ，斯カレバ古今英傑ノ伝記ヲ修飾シテ作レル伝記小説如キモノ，亦完全ナル理想ヲ規定スルニ必要ナルベシ，馬琴流ノ小説ハ悄此ノ目的ニ適スルモノノ如シ。余ハ寧実際ノ事実ニ反スルモ，専ラ完全理想的ノ人物ヲ書キ出シテ，悪習ニ染マザル少年ノ脳髄ヲ育養センコトヲ欲スルモノナリ。」(22)

ここでは，人生の手本となるべき理想の人物像を小説の中にえがくことがすすめられている。ここでは，小説の価値は道徳性をめぐって論じられているのである。道徳上好ましくない小説は登場人物に理想的な人物を配することによって，道徳的になるとされている。

明治26年には，「教育と文学」（久津見蕨村）と題された具体的な作品名に言及する形での文学教育論の嚆矢とも言うべき記事が発表される(23)。この記事では「小説と学生」で批判された小説の「実益」のなさに価値づけをし，美を感じることに意味があると説いている。次いで，文学を中心とした教育課程編成を提唱し，当時の「科学教育」中心の教育課程からの転換を主張している。

「余の思考する所に拠れば，中等教育の或る部分に於て，文学的教育を施設し，以て少年に温雅優美の精神を修養せしめ，利に走るよりも，道に就かんことを想ひ，野に流るるよりも，文に傾かんことを希ひ，私を忘れて，公を事とし，質を知ると同時に霊を知るに至らしめざる

可らずを為すなり，是れ人生の大事を遂行する所以の，資格を修養するものにして，人の人たるべき所以なり，美術国たる我国に於ては，特に最も必要なることなればなり」(24)

文学を教育に応用する効能は述べているが，なぜ中等教育なのかについての言及はない。また，教材については，古典，近代文学，ヨーロッパの文学などからとることをすすめている。日本文学の中では源氏物語のうち，若紫，箒木をのぞいたものをすすめる一方，梅暦，辰己園などは，寄宿舎にもいれるべきではないと述べている。また，軽文学といっても馬琴，春水，谷蛾，京伝などは勧められると述べる一方，その中でも美少年録のようなものは除くべしといっている。文学と哲学を対置し，前者を人間を研究するのにおもしろみをつけたものと述べる。この論は中等教育における国語科の内容に関する提言ではなく，教育課程編成の基礎に文学を位置づける点が他の論と異なっている。この文学教育論は，それまでの道徳注入的な論とは異なり，文学教育による修養を提唱している。

明治29年の「教育と物語小説との関係」(筆者不詳)(25)では，「大教育家ペスタロッチは，物語小説を以て，普通教育に欠くべからざる要具なりとし，教育的文学の為に，一基礎を築きたり。」と，小説の教材化の根拠をペスタロッチの教育学においている。小説を教材とすることを前提とした上で，避けるべき作品群の条件をあげている。

「教育上の要具として用ぬべき物語小説に就て，避けざる可らざる諸点を概言せんには，第一には余りに奇矯危激にして，児童少年の心意を魔酔せしむるが為に，児童少年は，之に心酔して，他の有用にして真面目なる書物を読むの念を絶ち，遂に真面目なる書物の趣味をも失はしむるもの，是なり。(中略) 第二には，物語小説の中に存する悲哀に就て，同情を表すること，遂には習慣となりて，反て実際の事に付ては同情を薄くすること是なり。(中略) 第三には，物語小説は，児童少年の心意に仮作なりとは云へ，不徳罪悪の事故を表現せしむるものなるが故に，児童少年をして，屡々之を連想せしめ，遂には為に其の心意を染汚せしむること，是なり。」(26)

「今や本邦各種の学校に於ては，往々欧米諸家の物語小説を教科書に供せり。(中略) 我国の如き，道徳を重んじ，国粋を尊び，欧米諸国と国体を異にする国柄に於ては，教育者は，特に深く意を注きて，文学書を選択し，以て之を教育上に用いさるべからず。」(27)

ここでは，物語小説が教育のために使用されることを前提にその注意事項が述べられている。また，良い物語を読んで良い趣味を養うことを奨励し，一方，まじめでない物語によって「心意を染汚」することが懸念されている。また，この記事中「趣味」が出てくるが，神野 (1994) によれば，「趣味」は明治40年ごろに人口に膾炙するようになった語で，雑誌などでは，20年代から使われていたとされている。この記事では「ものごとの好み」といった意味で使われている。

明治32年，桃渓生「教育と文学及趣味教育」では，五十嵐力の論文を引きつつ，短い記事の中で現在の教育には趣味の教育がかけていること，また，現行の読本には趣味がかけていることについて述べ，趣味の教育を行うことを主張している(28)。

明治35年「教育小説について」(筆者不詳)(29)では，「教育小説は自由芸術のやうに第一に芸術品としての価値を見るのでなく，まづ倫理道徳論の生硬俚耳に遠きものを，面白可笑しく具體的に砕いて，何の雑作もなく少年の頭脳に注入むのだ。そして知らず知らずの間に，未だ知らざる人生の経験を與へ，空想を擴大にし，趣味に近づくの素地をなさしむれば足りるのだ。」『教育界』の次々号「教育小説家」(筆者不詳)(30)では，この記事におおむね賛成した後，読者を青年よりむしろ家庭にもとめ，ルソーのエミールのごとき大作の教育小説を期待すると述べている。いくぶん図式的にまとめるとすれば，一般の小説と教育小説を区別し，小説に芸術を，教育小説に道徳教育を割り当てているのである。

初期の記事では，文学の教育的価値を肯定する論拠は道徳性の有無で論じられている。次に，文学を通じて人

間（生徒，児童，成人）の行動規範を伝達するというもの（道徳性の陶冶）から，文学そのものの美を感じるというものに移っていく。明治29年までは，美術芸術の一種として文学を教えるという論調も見られる一方で，現在の文学作品の内容から見て，教育には適さないから，排除もしくは改良が主張されているという論調もあり，後者の方が優勢であるということができる。また，明治29年から，「趣味」という言葉が散見されるようになる。明治32年の「教育と文学及趣味教育」の中では五十嵐力の論文を引用し，「文学趣味」(31)を備えた小学読本の出現を待ち望んでいる。それ以前の教育世論上での「趣味」は「好み」といった程度の意味であったが，その後，この趣味の意味が高い価値基準を示す用法と変化していったことが看取できる。

以上から，文学の教育的価値は社会教育的に認められた後，中学校において認められることとなった。その内容も道徳教育から文学性の理解へと移っていくことが明らかになった。

4．結論及び今後の課題

中学校令施行規則の中に文学が登場する以前に，教育雑誌の中で議論されていたことが確認された。同じ時期の言文一致運動のように，強力に議論を先導する人々が存在したものとは異なり，教育雑誌という場においては，文学は徐々に教育の中に位置づいていったことが看取できる。高橋（1992）では，青少年の風紀問題の原因として文学が批判され，明治40年前後から，文学の道徳教育的側面が強調されたと指摘されている。が，以上の検討でもわかるように明治20年代から，文学の道徳教育的利用は教育世論上に表されている。文学教育は道徳教育的利用を当初から期待されていたのである。中学校令施行規則以後は，教育雑誌の論点は文学の教育的価値の有無から，文学教育の改善などにうつっていく(32)。

文学は特に大きな事件を引き起こすことなく，法規の中に位置づいた。中学校令施行規則をうけた明治35年2月6日文部省訓令第3号の「中学校教授要目」の法的拘束性を含めて，具体的な教育の場で「文学ノ趣味」がどのように解釈されたか。次はこの点を明らかにすることが必要となるだろう。これが，いわば，通時的な問題関心とするならば，共時的には次の課題が設定できる。

本論文では，中等教育の中でも特に中学校を検討の対象としたが，高等女学校を中心とした女子中等教育と男子中等教育においては，どのように異なるか。高等女学校は当時直接的に上級学校と接続していなかった。中学校とは同じ中等教育機関とはいえ，その性質が異なっていたのである。そのため，文学教育に求められたものも異なっていたと考えられる。高等女学校国語科の性質および中学校国語科との比較が問題となるであろう。本論文で明らかにした中学校国語科での文学観の検討で得た視点をもとに明治期中等普通教育における文学教育を明らかにしていきたい。

注

(1) ここでは漢文科存廃問題という呼び方をとっているが，これは打越（1990）によっている。山根（1966）は「「漢文科目廃止」の事件」とよび，田坂（1969）は「漢文問題」とよび，長（1992）は「漢文科廃止問題」とよんでいる。ここでは暫定的に漢文科存廃問題としておく。

(2) 紅野（1996）54ページ

(3) 同上，56ページ

(4) 調査した雑誌は以下の雑誌である。
『教育時論』（1～817号，明治18～40年），『教育報知』（1～656号，明治18～37年），『教育檀』（1～26号，明治30～32年），『教育実験界』（1巻1号～16巻4号，明治31～38年），『教育公論』（1～32号，明治32～33年），『国民教育』（1～15号，明治35～36年），『教育界』（1巻1号～7巻2号，明治34～40年），『実験教授指針』（1巻1号～5巻6号，明治35～39年），『大日本教育会雑誌』（1～182号，後続誌『教育公論』183～309号，明治16～40年）

(5) 今泉定介「中等教育に於ける国文科の程度」（『教育

時論』334　明治27年）14～16ページ

(6)「古文課全廃すべからず」（『教育時論』374　明治28年）10ページ

(7) 岡倉由三郎「国語国文の教授法に就きて」（『教育時論』425　明治29年）17～21ページ

(8) 同上，20～21ページ

(9)「中学の国語科」（『教育時論』533　明治33年）36～37ページ

(10)「中学校の文学科」（『教育界』1-11　明治35年）125～126ページ

(11) 同上，125ページ

(12) 浮田（1998）

(13) 村尾壹太郎「小説稗史ノ濫出及改良ノ儀」（『教育時論』60　明治19年）6～7ページ　この文章には句読点なし。

(14) 同上，7ページ

(15) ひとつの可能性として新聞記事を脚色した作品を念頭においたのではないかという可能性を指摘しておく。本田康雄（1998），松山巌（1997）これらの記事は江戸のジャーナリズムで活躍した戯作者によるものとされている。それはまた，近世の読本などとひとつづきのものと当時とらえられていたと推測することができる。

(16) 関直彦「小説の改良」（『大日本教育会雑誌』48　明治20年）6～17ページ　この文章には句読点なし。

(17) 同上，6，8，14～15，17ページ

(18) 塵外散士「小説ト学生」（『教育時論』153　明治22年）9～10ページ

(19) 同上，9ページ

(20) 同上，10ページ

(21) 菊地熊太郎「教育上小説ノ価値ヲ論ズ」（『大日本教育会雑誌』90　明治22年）723～730ページ

(22) 同上，730ページ

(23) 久津見蕨村「教育と文学」（『教育時論』299　明治26年）10～16ページ

(24) 同上，12ページ

(25)「教育と物語小説との関係」（『教育時論』403　明治29年）6～8ページ

(26) 同上，6～7ページ

(27) 同上，7～8ページ

(28) 桃溪生「教育と文学及趣味教育」（『教育実験界』3-11　明治32年）42～43ページ

(29)「教育小説について」（『教育界』1-8　明治35年）123～125ページ

(30)「教育小説家」（『教育界』1-10　明治35年）126～127ページ

(31) 文中の言葉の引用。五十嵐力が使用したのか，記事を書いた記者の言葉なのかは文脈からは判断できない。

(32) 注2で示した史料の範囲で指摘できる。

引用文献

浮田真弓（1998），「明治中後期中学校国語読本教科書に関する一考察」『人文科教育研究』25　17～26ページ

打越孝明（1990），「中学校漢文科存廃問題と世論―明治三十四年「中学校令施行規則」発布前後―」『学術研究―教育・社会教育・教育心理・体育編―』39　29～42ページ

長志珠絵（1992），「日清戦後における「漢字」問題の転回―帝国教育言文一致運動と漢学者懇親会をめぐって―」『ヒストリア』136　1～22ページ

教育ジャーナリズム史研究会編（1986），『教育関係雑誌目次集成』日本図書センター

紅野謙介（1996），「一九〇〇年前後・中等教育の再編と『国語』教科の成立―文学言説の歴史的布置の探究」『語文』95　53～67ページ

神野由紀（1994），『趣味の誕生　百貨店がつくったテイスト』勁草書房

高橋一郎（1992），「明治期における「小説」イメージの転換―俗悪メディアから教育的メディアへ―」思想812　175～192ページ

田坂文穂（1969），『明治時代の国語科教育』東洋館出版社

本田康雄（1998），『新聞小説の誕生』平凡社
増淵恒吉（1981），『国語教育史資料 第五巻 教育課程史』東京法令出版株式会社
松山 巌（1997），『うわさの遠近法』講談社学術文庫（底本は1993 青土社）
文部省内教育史編纂会（1938），『明治以降教育制度発達史 第三巻 第四巻』教育資料調査会
山根安太郎（1966），『国語教育史研究—近代国語科教育の形成』溝元積善館

SUMMARY

The aimes of this research were (i) to collect and classify the various theories on the teaching of literature at high schools during the late Meiji Era (before and after 1990), (ii) to trace how they were understood in contemporary opinion about education and (iii) to elucidate the phases they underwent through data collected from educational magazines published at that time.

The results form this research are as follows.

[1] among the various opinions, the lack of morality seen in some teaching materials from contemporary Japanese literature was severely criticized by many commentators;

[2] in contrast, teaching materials that emphasized morality and tried to establish an identity as a Japanese as aims of high school education were highly appreciated; and

[3] literary works containing the above-mentioned high moral quality were beginning to occupy an important position in the teaching of the Japanese language.

How teaching literarure was pursued in girls' high schools, which were not yet admitted as being a direct part of higher education in the late Meiji Era, will be investigated in a future study.

The Science of Reading, Vol. 43, No. 2 (1999)

速読訓練の効果に関する検討*

つくば国際大学　山本哲也
つくば国際大学　佐藤泰正
つくば国際大学　桐原宏行**

1．問題と目的

現代社会は，情報化社会と呼ばれるように，我々はおびただしい量の読書材料に囲まれている。このような社会においては，我々は，日々多くの読書材料を目にすることとなる。この日常的な活動である読書を読む目的によって分類すると，「娯楽的読書」，「教養のための読書」，「調査研究のための読書」，「情報を得るための読書」に分けられる（図書館教育研究会，1994）。このように，読書の目的は様々であるが，多くの読材料をいかに速く，手際よく処理するかが情報化社会においては重要なポイントとなる（佐藤，1988）。このような社会的状況にあって，読材料を速く正確に理解するための速読法に対する関心が非常に高まっている。

わが国における速読訓練の研究には，佐藤（1969）の行った大学生を対象にした実験的研究がある。佐藤（1969）は，速読訓練を行った実験群，と速読訓練を行わない統制群について，訓練前後にプリテストとポストテストを実施し，その結果を比較した。その結果，実験群はプリテストの1分間の読字数が631字であったものが，ポストテストでは916字になり，統制群はプリテストが623字であったのがポストテストでは615字であった。読時数の増減をみると，実験群の285字増に対し，統制群は8字減であり，実験群に読速度の向上が認められた。

また，佐藤（1988）は，速読訓練に参加した者45人を集中訓練群（21人）と分散訓練群（24人）の2群に分けて訓練前後の読速度を比較した。その結果，全体では1分間の平均読字数が727字から1106字に向上し，集中訓練と分散訓練では集中訓練の方が進歩が大きく効果的であったという結果を得ている。

これらの研究では，訓練開始前と開始後の読速度の違いから効果を検証しているが，訓練の経過に伴う読速度の変化に関しては明らかになっていない。そこで本研究では，速読訓練の効果について，訓練の経過に伴う読速度の変化について明らかすることを目的とする。

2．方　法

(1) 被検者

朝日カルチャースクールの「速読法」の講座に通う19歳から66歳までの44人（男性21人，女性23人）を対象に長文速読訓練を実施した。

(2) 手続き

速読訓練の読書材料としては，物語文である『サンクス物語』（佐藤，1995）を用いた。本材料は，第1章から第9章で構成されている。それぞれの章の総字数をTable 1に示した。

本材料の内容は，大学教授である著者の作った少年野球チームが誕生してからの3年間を，著者とチームの子供たちとのふれあいについてまとめたもので，チームを作り上げていく上での苦労話や子供たちの成長の様子，試合での活躍ぶり，親たちの応援の姿などのほか，著者

---

* The effect of training on reading rate.
**YAMAMOTO, Tetsuya; SATO, Yasumasa; & KIRIHARA, Hiroyuki (Tsukuba International University)

Table 1 『サンクス物語』の各章の総字数

章	字数（字）
第1章	4,420
第2章	9,730
第3章	7,380
第4章	10,430
第5章	4,590
第6章	9,290
第7章	8,250
第8章	9,140
第9章	9,020

が心理学者としての立場から，10数年にわたる少年野球との関わりをもとに，少年野球やその指導について書いたものである。

速読訓練は，1日1章ずつ，計9回の短期集中訓練を行った。被検者が，各章の読み始めから読み終わりまでの所要時間をストップウオッチで計測した後，読みの理解度をチェックするための10題の選択式の理解テストを行った。所要時間より読速度（分速；総字数/読時間×60）が，理解テストにより理解点（10点満点）が算出された。

3．結果と考察

(1) 速読訓練における読速度の推移の全体的傾向

ここでは，速読訓練における読速度の全体的傾向について見る。

第1回，第9回の平均読速度は，それぞれ1021.2字/分（SD：362.2），1393.0字/分（SD：519.9）であった。

第1回から第9回までの各訓練で得られた読速度について1要因の反復測定分散分析を行った結果，有意な読速度の向上が認められた（$F=15.20$, $df=8$, $p<.01$）。

読速度の推移を詳細に見ると，第1回から第2回までの読速度が大きく向上する段階，第3回から第6回までの読速度が停滞する段階，さらに，第7回から第9回までの再び大きく向上する段階の3段階に分けることができる。

以上の結果より，速読訓練における読速度の推移の仕方は，直線的な伸びを示すわけではなく，伸びが停滞する段階があるが，全体としては，速読訓練の効果が確認できた。

ところで，速読訓練により読速度が向上しても，内容の理解度が低下していては読みの能力が向上したとは言い難い。そこで，訓練で得られた第1回と第9回の理解点の差異を検討するために，対応のあるt検定を行ったところ，理解点の平均は第1回が6.71，第9回は7.05であり，有意な得点差は認められなかった。つまり，理解度はそのままで，読速度が向上したことになる。

(2) 性別による速読訓練の効果

Fig. 1は，第1回から第9回までの平均読速度の変化を性別により表したものである。

第1回から第9回までの各訓練で得られた読速度と性別について2要因の反復測定分散分析を行ったところ，

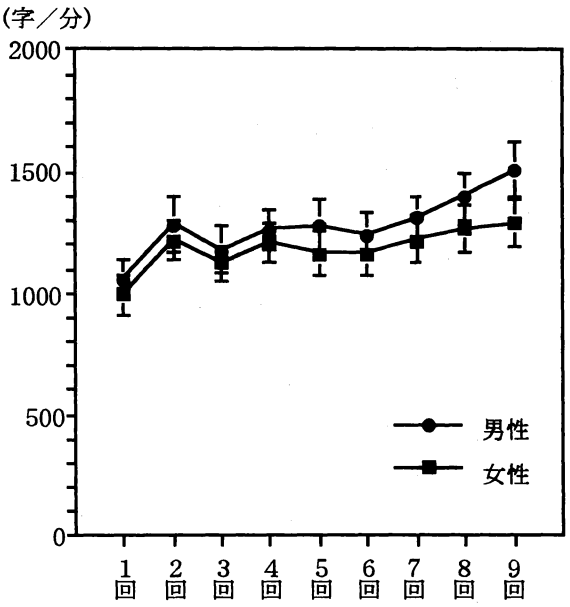

Fig. 1 男女別に見た速読訓練における平均読速度の変化

各群ともに訓練の進行に伴う読速度の向上が認められていたが（F=15.20，df=8，p<.01），性別による読速度には有意差は認められなかった。また，読速度の推移と性別との間の交互作用に有意差は認められなかった。

つまり，男女ともに，速読訓練によって読速度は向上しているが，読速度に性差はなく，速読訓練の推移の仕方も男女による差はないといえる。

(3) 年齢による速読訓練の効果

年齢による読速度の訓練の効果を検討するために，被検者を20歳代以下(n=13)，30歳代—40歳代(n=17)，50歳代以上（n=14）の3群に分割して分析を行った。

Fig. 2は，第1回から第9回までの平均読速度の変化を年代別に表したものである。

第1回から第9回までの各訓練で得られた読速度と年齢群について2要因の反復測定分散分析を行ったところ，各年齢群ともに訓練の経過に伴う読速度の向上が認められた（F=15.43，df=8，p<.01）が，年齢群による読速度には有意差は認められなかった。

一般に，加齢に伴い様々な能力の低下が示されるとされているが，本研究のように時間測定読書によって「読むことへの動機づけ」が十分形成されている場合には，年齢が読速度の変化を規定する要因とはならないことが示唆される。

(4) 訓練開始時の読速度別に見た速読訓練の効果

第1回の訓練後の平均読速度（1021.2字/分，SD：362.2）をもとにして，第1回訓練後の平均読速度+0.5SDを上回る者を上位読速度群（n=11，$\bar{x}$=1541.1字/分，SD：250.3），平均読速度±0.5SDの範囲にある者を中位読速度群（n=19，$\bar{x}$=964.2字/分，SD：93.0），平均読速度—0.5SDを下回る者を下位読速度群（n=14，$\bar{x}$=690.2字/分，SD：149.2）の3群に分割した。

Fig. 3は，第1回から第9回までの平均読速度の変化を訓練開始時の読速度群別に表したものである。

第1回から第9回までの各訓練で得られた読速度と訓練開始時の読速度群について2要因の反復測定分散分析を行ったところ，訓練開始時の読速度群別による速読訓

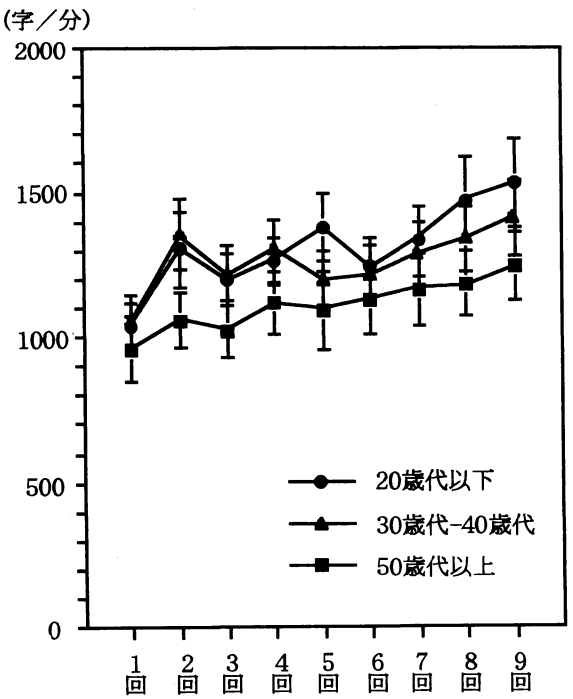

Fig. 2　年代別に見た速読訓練における平均読速度の変化

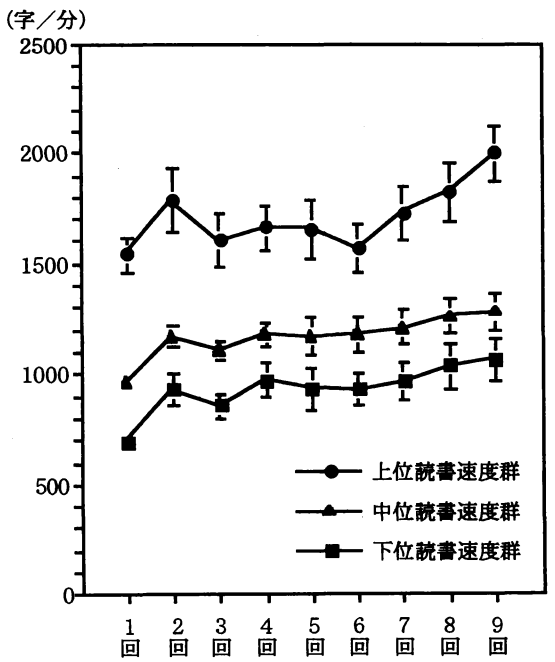

Fig. 3　訓練開始時の読速度群別に見た速読訓練における平均読速度の変化

練における読速度に有意差が認められるとともに（F＝.25.74，df＝2，p<.01），速読訓練に伴う読速度の向上が認められた（F＝15.31，df＝8，p<.01）。また，読速度群と速読訓練後の読速度の推移との間の交互作用に有意差は認められなかった。

つまり，訓練開始時の読速度の違いにも関わらず，読速度の向上は各群に認められており，今回の訓練ではその差が縮まらなかったことになる。

4．まとめと今後の課題

本研究では，速読訓練の効果について，訓練の経過に伴う読速度の変化について検討した。その結果，以下の点が明らかになった。

・速読訓練による読速度の変化は，第1回から第2回までの読速度が大きく向上する段階，第3回から第6回までの読速度が停滞する段階，第7回から第9回までの読速度が再び大きく向上する段階の3段階に分けることができた。

・性差，年齢差，初期読速度群別に読速度の変化を検討したが，本研究の被検者に関しては，どれも読速度を規定する要因とはなっていなかったが，これらの要因に関係なく同様に読速度が向上することが明らかになった。

以上の結果を踏まえ，以下の点を今後の課題としたい。

・本研究では訓練材料として物語文を用いたが，論説・説明文などの文章の構成や文体の難易度の異なる読材料を用いた際にはどのような読速度の変化があるのか。

・本研究で分析を行った長文速読訓練は，朝日カルチャースクールの「速読法」の講座（Table 2）における訓練の導入期に行われたものであるが，プログラムの進行によるトレーニングの効果の検証の必要性がある。

・本研究では，全9回の短期集中訓練での読速度の推移を検討したが，さらに訓練を継続した場合の読速度がどのように変化していくのか，特に，訓練開始時の読速度が中位，下位であった者の読速度がいかなる変化を見せるのか。

・個人の読みへの動機づけの程度を含めた読書環境の違いが，速読訓練にいかなる影響を及ぼしているのか。

Table 2 朝日カルチャースクール「速読法」講座のプログラム

回	内 容
第1講	速読とは何か
第2講	速読を妨げる要因とその強制方法について
第3講	速読と眼球運動
第4講	キーワード訓練・スキャニング訓練
第5講	速読法から速読術へ（スキミング）

文 献

佐藤泰正 1969『速読法』，旺文社.

佐藤泰正 1988『速読の科学』，講談社.

佐藤泰正 1995『サンクス物語』，学芸図書.

佐藤泰正 1997『速読のし方で「脳」が鋭くなる』，青春出版社.

Stat View ユーザーフォーラム編 1996『Macintosh版StatView4.5オフィシャルガイドブック』，南江堂.

図書館教育研究会 1994『読書指導通論—児童と青少年の読書活動—』，学芸図書.

SUMMARY

The purpose of this study was to investigate the effect of training on reading rates through motivated reading. Experiments were conducted on 44 students in a reading class for increasing reading speed. The subjects ranged in age from 19 to 66 and there were 21 males and 23 females. The story used as the teaching material consisted of 9 chapters. The subjects were asked to read one chapter of the material in a day. In order to investigate the effect of this exercise, the time it took the subjects to read each chapter was measured.

The results were as follows:

(1) Three stages could be observed in regard to changes in the average reading rate. The first was the stage where the reading rate increased. The second was the stage where the reading rate was stagnant. The third was the stage where the reading rate again increased.

(2) The training for increasing reading rate was effective in improving the subjects' reading rates regardless of gender or age.

(3) An improvement in reading rate could be seen in all three groups that were divided according to the score achieved during the first class, and the initial gaps between the three groups remained after all sessions had been completed.

The Science of Reading, Vol. 43, No. 2 (1999)

カタカナ4文字語を構成するカタカナバイグラム頻度表 (II)*

名古屋大学　川　上　正　浩**

問題と目的

人間の言語処理活動を明らかにするために，単語認知過程の解明は避けては通れない重要な課題である。これまでにも多くの単語認知過程モデルが提唱されてきた（たとえばMcClelland & Rumelhart, 1981; Paap, McDonald, Schvaneveldt, & Noel, 1987; Rumelhart & McClelland, 1982; Seidenberg, 1989; Seidenberg & McClelland, 1989)。こうしたモデルの多くが単語を構成する構成要素と単語とにおける部分全体関係を問題としている。そうした単語構成要素の1つとしてバイグラム（bigram，単語中に連続して現れる特定の2文字。たとえば単語“sick”中の“si”）を挙げることができる。川上（1999）は，カタカナ4文字表記語を構成するカタカナバイグラムに注目し，カタカナ文字69文字によって構成される4761個（69×69）のカタカナバイグラムについて，そのtype頻度を報告している。川上（1999）の方法は，Macintosh版岩波広辞苑第四版（新村出記念財団，1995）に基づき，カタカナ4文字表記語として1627項目を定義し，各カタカナバイグラムが，カタカナ4文字表記語中の何語に出現するのかを算出するものであった。出現位置として最初の2文字（たとえば“アイロン”の“アイ”が占める位置：バイグラム1。以下b1），真ん中の2文字（“アイロン”の“イロ”：バイグラム2。以下b2），最後の2文字（“アイロン”の“ロン”：バイグラム3。以下b3）の3つの位置毎に各カタカナバイグラムの出現頻度が算出された。川上（1999）の報告に基づけば，カタカナ4文字表記語について，カタカナバイグラム頻度を算出することが可能となる。まず，カタカナ4文字表記語を構成するカタカナバイグラムとして，その出現位置に対応して3つのカタカナバイグラムが抽出される。具体的にはカタカナ4文字語“アイロン”から“アイ”，“イロ”，“ロン”という3つのカタカナバイグラムが抽出される。これら3つのカタカナバイグラムが当該位置に出現する頻度の合計を，当該単語のカタカナバイグラム頻度と定義する。ふたたび具体例でいえば，カタカナバイグラム“アイ”のb1としての頻度が12，“イロ”のb2としての頻度が7，“ロン”のb3としての頻度が22であるため，カタカナ4文字語“アイロン”のカタカナバイグラム頻度は41（12＋7＋22）であると定義される。本研究では，川上（1999）の続報として，1627項目のカタカナ4文字表記語について，そのカタカナバイグラム頻度を算出する。

方　法

1．カタカナ4文字語の定義

川上（1999）の基準に準じて，カタカナ4文字表記語を定義した。具体的には，以下の3つの基準に準じるカタカナ4文字列をカタカナ4文字表記語と呼ぶ。

1．Macintosh版岩波広辞苑第四版に見出しとして登録されていること。

---

* A table of Katakana bigram frequencies of Japanese 4-letter Katakana words.

**KAWAKAMI, Masahiro (Nagoya University)

2．Macintosh版岩波広辞苑第四版に，その表記としてカタカナ4文字表記が登録されていること。

3．全ての文字が直音あるいは撥音（ン）である（拗音，促音，長音を含まない）こと。

2．各カタカナ4文字表記語のカタカナバイグラム頻度の算出

川上（1999）が報告しているカタカナバイグラム頻度に基づき，1627項目のカタカナ4文字表記語に対してそのカタカナバイグラム頻度を算出した。具体的な算出方法は「問題と目的」で述べた通りである。

結果と考察

カタカナ4文字表記語（word）1627項目のカタカナバイグラム頻度（bT）及び，位置毎の各カタカナバイグラムのカタカナバイグラム頻度（b1，b2，b3）をTable 1に示した。Table 1において，アステリスクを付したカタカナ4文字表記語（例："アダムズ*"）は，広辞苑中に，同一表記項目が2つ存在したことを示す。同様に添字"3"の付いた語（例："パスカル3"）は，同一表記項目が3つ存在した項目である。広辞苑中に同一表記項目が4つ以上存在する項目は見いだせなかった。

本研究の目的は，カタカナ4文字表記語について，そのカタカナバイグラム頻度を算出することにあった。本研究により，カタカナ4文字表記語のカタカナバイグラム頻度が評価・統制可能となった。たとえば"ブランド"（bT=56）は"ボサノバ"（bT=3）に較べてカタカナバイグラム頻度がより高く，カタカナ語らしい文字の並びをしていることがわかる。Rice & Robinson（1975）の研究が示すように，バイグラム頻度の効果が抑制的（バイグラム頻度が高いほど当該単語の認知が困難になる）であるのか否かを，実験的に検討するためには本研究の報告は必須のものとなる。表記と音韻の対応関係は，単語認知過程を解明する上で注目すべき点である。特に欧米諸言語においては綴りと音韻の対応の一貫性（consistency）あるいは規則性（regularity）が，そうした綴りを含む単語の認知に影響を及ぼすことが知られている（Content, 1991; Glushko, 1979; Jared, 1997; Stone, Vanhoy, & Van Orden, 1997）。欧米諸言語においては，バイグラム頻度は，むしろ正書法的（orthographic）な特性であり，音韻的特性ではない。たとえば英単語の語彙判断課題あるいは命名課題におけるバイグラム頻度の効果を検討したAndrews（1992）は，この要因を正書法的な要因（orthographic redundancyを代表する要因）と見なして議論を進めている。しかしながら，カタカナバイグラム頻度は，正書法的な要因であると同時に必然的に音韻的な要因でもあり得る。なぜなら，カタカナは文字と音韻との対応が一義的であり，当該カタカナバイグラムが複数の単語の中に現れるときには，それらは常に同一の音韻を有している。具体的に述べるならば，英単語におけるバイグラム"si"は，単語"sick"や単語"size"の中に出現するが，それぞれの単語においてバイグラム"si"が対応する音韻は異なる。しかしながらカタカナバイグラム"サイ"はそれを含むどの単語においても一貫した音韻/sai/に対応している。こうした観点から欧米諸言語におけるバイグラム頻度の効果とカタカナバイグラム頻度の効果とを比較検討することは，言語を越えた一般的な単語認知過程の究明のための重要な課題である。

さらに，より一般的な認知心理学実験の枠組みからは，本研究の結果は以下のような位置づけを持つ。最近の単語認知研究の刺激選択においても，そのバイグラム頻度に注意が払われており（たとえばCole, Segui, & Taft, 1997; Jared, 1997; Mayall, Humphreys, & Olson, 1997; Ziegler, Montant, & Jacobs, 1997），単語認知過程の解明を目指す実験者の多くは，単語のバイグラム頻度を統制すべき要因であると見なしている。今後本研究の結果に基づき，認知心理学的実験に用いられる刺激語の統制を行っていくことが期待される。

引用文献

ANDREWS, S. (1992). Frequency and neighborhood effects on lexical access: Lexical similarity or orthographic

redundancy? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 18, 234–254.

COLE, P., SEGUI, J., & TAFT, M. (1997). Words and morphemes as unit for lexical access. *Journal of Memory and Language*, 37, 312–330.

CONTENT, A. (1991). The effect of spelling–to–sound regularity on naming in French. *Psychological Research Psychologische Forschung*, 53, 3–12.

GLUSHKO, R.J. (1979). The organization and activation of orthographic knowledge when reading aloud. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 5, 674–691.

JARED, D. (1997). Spelling–sound consistency affects the naming of high–frequency words. *Journal of Memory and Language*, 36, 505–529.

川上正浩 (1999) カタカナ4文字語を構成するカタカナバイグラム頻度表 (I) 読書科学, 43, 1–12.

MAYALL, K., HUMPHREYS, G.W., & OLSON, A. (1997). Disruption to word or letter processing? The origins of case–mixing effects. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 23, 1275–1286.

MCCLELLAND, J.L., & RUMELHART, D.E. (1981). An interactive activation model of context effect in letter perception: Part 1. An account of basic findings. *Psychological Review*, 88, 375–407.

PAAP, K.R., MCDONALD, J.E., SCHVANEVELDT, R.W., & NOEL, R.W. (1987). Frequency and pronounceability in visually presented naming and lexical–decision tasks. In M. Coltheart (Ed.), *Attention and performance XII: The psychology of reading* (pp. 221–244). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

RICE, G.A., & ROBINSON, D.O. (1975). The role of bigram frequency in the perception of words and nonwords. *Memory & Cognition*, 3, 513–518.

RUMELHART, D.E., & MCCLELLAND, J.L. (1982). An interactive activation model of context effects in letter perception: Part 2. The contextual enhancement effect and some tests and extensions of the model. *Psychological Review*, 89, 60–94.

SEIDENBERG, M.S. (1989). Visual word recognition and pronunciation: A computational model and its implications. In W. Marslen–Wilson (Ed.), *Lexical representation and process.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

SEIDENBERG, M.S., & MCCLELLAND, J.L. (1989). A distributed, developmental model of word recognition and naming. *Psychological Review*, 96, 523–568.

新村出記念財団 (1995) 広辞苑第四版CD–ROM 岩波書店

STONE, G.O., VANHOY, M., & VAN ORDEN, G.C. (1997). Perception is a two–way street: Feedforward and feedback phonology in visual word recognition. *Journal of Memory and Language*, 36, 337–359.

ZIEGLER, J.C., MONTANT, M., & JACOBS, A.M. (1997). The feedback consistency effect in lexical decision and naming. Journal of Memory and Language, 37, 533–554.

SUMMARY

This study presents a table of length-specific, positional Katakana-bigram type-frequency counts for 1627 4-letter Katakana words based on Kawakami (1999). The word population on which the table is based was selected from a representative Japanese dictionary, the Macintosh Iwanami KOHJIEN, 4th edition. on CD-ROM.

Table 1 presents the sum of the Katakana bigram type-frequency counts for each of the 1627 4-letter Katakana words under the column heading bT, and also the positional frequency counts in 4-letter Katakana words under the column heading b1, b2, and b3.

This table may be employed to provide normative type-frequency data for experimental studies in Japanese word recognition using 4-letter Katakana words.

Table 1—1 カタカナ4文字表記語(word)のカタカナbigram頻度(bT)及び位置毎のbigram頻度(b1, b2, b3)

word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3
アイアイ	21	12	7	2	アテンポ	6	3	2	1	アリウム	35	5	13	17	アンペル	30	19	8	3	ウイルス	17	2	4	11	エミグレ	3	1	1	1
アイアン	30	12	7	11	アデニン	12	1	1	10	アリゾナ	7	5	1	1	アンマン	40	19	3	18	ウガンダ	8	1	1	6	エランド	49	1	29	19
アイオワ	16	12	3	1	アトラス	11	2	1	8	アリバイ	10	5	2	3	イアソン	23	1	1	21	ウクレレ	5	1	3	1	エルエル	15	4	2	9
アイコン	32	12	2	18	アトリエ	9	2	4	3	アリラン	21	5	1	15	イエズス	4	2	1	1	ウズベク	3	1	1	1	エルギン	8	4	2	2
アイゼン	20	12	2	6	アドニス	10	6	1	3	アルカス	29	21	5	3	イエメン	10	2	1	7	ウタント	43	1	9	33	エルトン	48	4	13	31
アイダホ	14	12	1	1	アドマン	25	6	1	18	アルカリ	29	21	5	3	イオニア	9	1	1	7	ウブサラ	3	1	1	1	エルミン	20	4	6	10
アイテム	16	12	2	2	アドリブ	10	6	2	2	アルカン	37	21	5	11	イカロス	12	1	5	6	ウラシル	7	2	3	2	エレミヤ	6	1	3	2
アイドル	20	12	3	5	アドルノ	10	6	2	2	アルキル	24	21	2	1	イキシア	12	1	4	7	ウラノス	6	2	1	3	エログロ	4	1	1	2
アイバク	16	12	3	1	アドルム	9	6	2	1	アルキン	35	21	2	12	イギリス	10	1	1	8	ウルガタ	7	3	3	1	エンゲル	14	5	5	4
アイリス	21	12	1	8	アドレス	15	6	1	8	アルケン	29	21	1	7	イクソラ	8	1	6	1	ウルトラ	21	3	13	5	エンジン	19	5	4	10
アイロン	41	12	7	22	アナクロ	9	3	2	4	アルコン	44	21	5	18	イグアス	9	2	2	5	ウルムチ	5	3	1	1	エンスト	40	5	7	28
アイヴズ	14	12	1	1	アナナス	7	3	1	3	アルゴン	34	21	5	8	イグアナ	7	2	2	3	ウレタン	17	1	1	15	エンゼル	11	5	4	2
アウロス	12	2	4	6	アナログ	7	3	1	3	アルシン	41	21	6	14	イサベラ	6	2	2	2	エアコン	22	3	1	18	エンリケ	8	5	1	2
アウロラ	7	2	4	1	アニオン	21	3	5	13	アルタイ	36	21	9	6	イサベル	9	2	2	5	エアトン	38	3	4	31	オアシス	7	1	1	5
アオザイ	3	1	1	1	アニマル	8	3	2	3	アルニカ	30	21	4	5	イスラム	6	1	1	4	エアバス	9	3	1	5	オイケン	9	1	1	7
アカシア	10	2	1	7	アニリン	32	3	3	26	アルニム	28	21	4	3	イズミル	3	1	1	1	エイドス	6	1	3	2	オカリナ	6	2	2	2
アカペラ	7	2	1	4	アネモネ	3	1	1	1	アルバム	26	21	4	1	イタリア	20	1	2	17	エウロパ	8	2	4	2	オカルト	12	2	3	7
アキレス	10	1	1	8	アバウト	8	2	2	4	アルバカ	23	21	1	1	イチジク	3	1	1	1	エウロペ	8	2	4	2	オクタン	22	1	6	15
アクサン	16	7	1	8	アバダン	12	2	2	8	アルピノ	28	21	6	1	イニング	15	1	2	12	エオシン	17	1	2	14	オケゲム	3	1	1	1
アクセス	12	7	3	2	アバレル	5	1	1	3	アルプス	25	21	1	3	イヌリン	28	1	1	26	エキソン	24	2	1	21	オゴタイ	8	1	1	6
アクセル	13	7	3	3	アフガン	11	3	2	6	アルヘイ	25	21	3	1	イバダン	11	1	2	8	エキホス	4	2	1	1	オシアン	15	2	2	11
アクチブ	12	7	4	1	アフリカ	10	3	2	5	アルベド	25	21	3	1	イフンケ	5	1	1	3	エクソン	30	3	6	21	オシリス	12	2	2	8
アクチン	29	7	4	18	アフレコ	9	3	2	4	アルペン	30	21	4	5	イプセン	9	1	2	6	エクラン	21	3	3	15	オスチヤ	6	2	3	1
アクバル	12	7	1	4	アブサン	11	2	1	8	アルマダ	26	21	4	1	イベリア	25	2	6	17	エクレア	9	3	3	3	オスマン	22	2	2	18
アクリル	12	7	3	2	アブダビ	4	2	1	1	アルミナ	29	21	6	2	イベント	37	2	2	33	エグレス	10	1	1	8	オニオン	19	1	5	13
アサンガ	5	1	1	3	アブリケ	7	1	4	2	アレウト	11	4	3	4	イラスト	37	2	7	28	エジソン	25	2	2	21	オネゲル	6	1	1	4
アザレア	5	1	1	3	アペニン	12	1	1	10	アレグロ	7	4	1	2	イラワジ	5	2	2	1	エジプト	6	2	2	2	オハイオ	3	1	1	1
アシスト	30	1	1	28	アボカド	3	1	1	1	アレルヤ	12	4	6	2	イリアス	16	3	8	5	エスアイ	10	7	1	2	オフコン	21	2	1	18
アジソン	26	3	2	21	アボリア	20	2	1	17	アレンジ	28	4	17	7	イリイチ	5	3	1	1	エスイタ	11	7	1	3	オフレコ	8	2	2	4
アジピラ	5	3	1	1	アボロン	25	2	1	22	アンカラ	29	19	6	4	イリノイ	6	3	2	1	エスエフ	11	7	2	2	オベロン	24	1	1	22
アジプロ	10	3	2	5	アマゾン	6	2	1	3	アンガス	27	19	7	1	イルマン	23	1	4	18	エスエル*	18	7	2	9	オムスク	8	2	2	4
アスキス	11	4	4	3	アマンド	24	2	3	19	アンクル	30	19	6	5	イレウス	18	3	3	12	エスキス	14	7	4	3	オムレツ	5	2	1	2
アステカ	12	4	7	1	アミアン	14	2	1	11	アングラ	28	19	6	3	イレブン	7	3	3	1	エステル	23	7	7	9	オラクル	13	2	6	5
アストン	48	4	13	31	アミエル	12	2	1	9	アングル*	31	19	6	6	イレヴン	5	3	1	1	エスプリ	11	7	2	2	オランダ	37	2	29	6
アスモデ	7	4	2	1	アメダス	8	5	1	2	アンゴラ*	26	19	5	2	インジゴ	16	11	4	1	エチレン	11	1	2	8	オリオン	23	3	7	13
アセアン	15	3	1	11	アメフト	11	5	1	5	アンザス	23	19	2	2	インダス	19	11	6	2	エトワス	3	1	1	1	オリジン	15	3	2	10
アセトン	35	3	1	31	アメラガ	8	5	2	1	アンセム	23	19	3	1	インテリ	19	11	7	1	エナメル	7	1	1	5	オリノコ	6	3	2	1
アセンズ	11	3	1	7	アメラグ	8	5	2	1	アンテナ	28	19	7	2	インテル	27	11	7	9	エニシダ	5	2	2	1	オルガン	11	2	3	6
アタカマ	4	1	2	1	アメリカ	12	5	2	5	アンデス	32	19	8	5	インデン	23	11	8	4	エニセイ	5	2	2	1	オルドス	7	2	3	2
アダジオ	9	5	1	3	アユタヤ	3	1	1	1	アントレ	33	19	12	2	イントロ	27	11	12	4	エネスコ	13	1	4	8	オレゴン	11	2	1	8
アダプト	8	5	1	2	アラゴン*	17	5	4	8	アンドラ	37	19	12	6	インドア	24	11	12	1	エフエフ	8	4	2	2	オレンジ	26	2	17	7
アダムズ*	9	5	1	3	アラスカ	13	5	7	1	アンナン	25	19	3	3	インドラ	29	11	12	6	エフエム	7	4	2	1	オロスコ	11	1	2	8
アダリン	32	5	1	26	アラニン	19	5	4	10	アンピル	25	19	5	1	インバラ	22	11	10	1	エフタル	17	4	2	11	オンエア	9	6	1	2
アダルト	13	5	1	7	アラバマ	11	5	5	1	アンプル	30	19	7	4	インビボ	17	11	5	1	エフワン	6	4	1	1	オングル	18	6	6	6
アテスト	32	3	1	28	アラビア	23	5	6	12	アンペア	28	19	8	1	インフレ	16	11	4	1	エプロン	26	1	3	22	オンサン	20	6	6	8
アテナイ	5	3	1	1	アリウス	30	5	13	12	アンペラ	31	19	8	4	ウイグル	9	2	1	6	エベント	36	1	2	33	オンドル	23	6	12	5

Table 1—2　カタカナ４文字表記語(word)のカタカナbigram頻度(bT)及び位置毎のbigram頻度(b1，b2，b3)

word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3
オンモン	15	6	3	6	カペイカ	8	1	3	4	カンカン	32	15	6	11	キマイラ	4	1	2	1	クワイン	21	1	4	16	コスモス	6	2	2	2
オンレコ	12	6	2	4	カミツレ	4	2	1	1	カンクリ	23	15	6	2	キムジハ	5	1	3	1	クンスト	36	1	7	28	コズロフ	7	1	1	5
カイゼル	7	3	2	2	カミルレ	4	2	1	1	カンザス	19	15	2	2	キリスト	36	2	6	28	グアナコ	5	3	1	1	コデイン	18	1	1	16
カイマン	26	3	5	18	カメリア	20	1	2	17	カンテラ	25	15	7	3	キリバス	9	2	2	5	グアニン	14	3	1	10	コナクリ	5	1	2	2
カイヨワ	7	3	3	1	カヤブテ	3	1	1	1	カンデヤ	24	15	8	1	キルギス	4	1	2	1	グアヤク	5	3	1	1	コニイン	19	2	1	16
カウント	43	1	9	33	カラカス	20	12	5	3	カンデラ	26	15	8	3	キンタル	25	1	13	11	グスタフ	6	1	4	1	コニウム	21	2	2	17
カエサル	4	1	1	2	カラカラ	21	12	5	4	カントル	40	15	12	13	ギベリン	33	1	6	26	グラタン	22	6	1	15	コバルト	10	1	2	7
カオリン	28	1	1	26	カラテア	15	12	2	1	カントン	58	15	12	31	ギヤマン	20	1	1	18	グラナダ*	9	6	1	2	コバイバ	7	1	5	1
カクタス	11	2	6	3	カラハリ	15	12	2	1	カンドル	32	15	12	5	ギヨチン	20	1	1	18	グラビア	24	6	6	12	コヒサン	10	1	1	8
カクテル	12	2	1	9	カラハン	17	12	2	3	カンナン	21	15	3	3	ギリシア	11	1	3	7	グラムシ	8	6	1	1	コブデン	6	1	1	4
カグナミ	4	1	2	1	カラバン	20	12	5	3	カンバス	25	15	5	5	ギロチン	22	1	3	18	グラント	68	6	29	33	コペイカ	8	1	3	4
カザルス	13	1	1	11	カラビナ	19	12	6	1	カンフル	22	15	4	3	ギンガム	9	1	7	1	グランド	54	6	29	19	コマンド*23	1	3	19	
カシウス	17	3	2	12	カラビン	23	12	6	5	カンプラ	24	15	7	2	クスクス	7	1	2	4	グリシン	20	3	3	14	コミカル	12	2	2	8
カシミア	10	3	2	5	カラフル	18	12	3	3	カンベラ	21	15	4	2	クセノン	7	1	2	4	グリニジ	5	3	1	1	コミスコ	11	2	1	8
カシミヤ	7	3	2	2	カラホト	15	12	1	2	カンペイ	26	15	8	3	クチクラ	3	1	1	1	グリンカ	18	3	14	1	コメコン	21	2	1	18
カスタム	12	4	4	4	カラメル	18	12	1	5	ガイアナ	13	3	7	3	クビライ	8	1	2	5	グルジヤ	9	4	4	1	コメント	38	2	3	33
カステラ	14	4	7	3	カラヤン	20	12	1	7	ガイウス	18	3	3	12	クマリン	30	1	3	26	グルテン	12	4	3	5	コラズム	10	1	3	6
カストル	30	4	13	13	カリアリ	18	9	8	1	ガイスト	35	3	4	28	クライン	44	13	15	16	グルデン	11	4	3	4	コリウス	29	4	13	12
カストロ	21	4	13	4	カリウム	39	9	13	17	ガジマル	5	1	1	3	クライヴ	29	13	15	1	グルント	40	4	3	33	コリオリ	12	4	7	1
カズワル	3	1	1	1	カリエス	19	9	5	5	ガソリン	29	1	2	26	クラウン	20	13	5	2	グレアム	7	2	3	2	コリンズ	25	4	14	7
カセイタ	7	1	3	3	カリスト	43	9	6	28	ガビアル	7	1	2	4	クラカウ	19	13	5	1	グレナダ	5	2	1	2	コリント	51	4	14	33
カゼイン	18	1	1	16	カリスマ	17	9	6	2	ガムラン	18	1	2	15	クラクフ	20	13	6	1	グロビン	8	2	1	5	コルシカ	14	5	6	3
カゾアル	6	1	1	4	カリバス	16	9	1	6	ガラシヤ	6	2	3	1	クラスト	48	13	7	28	グロリア	23	2	4	17	コルチン	27	5	4	18
カタカリ	9	4	2	3	カリブソ	12	9	2	1	ガラテヤ	5	2	2	1	クラトン	47	13	3	31	ケインズ	14	1	6	7	コルテス	10	5	3	2
カタコム	8	4	1	3	カリヨン	14	9	1	4	ガリウム	34	4	13	17	クラビホ	20	13	6	1	ケプロン	26	1	3	22	コルドバ	9	5	3	1
カタログ	9	4	2	3	カリンガ	26	9	14	3	ガリオア	12	4	7	1	クラフト*21	13	3	5		ケミカル	11	1	2	8	コルレス	15	5	2	8
カタンガ	16	4	9	3	カルサイ	18	13	4	1	ガリレイ	8	4	3	1	クラルテ	17	13	2	2	ケラチン	22	1	3	18	コレジヨ	6	2	3	1
カチオン	15	1	1	13	カルサン	25	13	4	8	ガリレオ	9	4	3	2	クランク	50	13	29	8	ケルゼン	12	3	3	6	コレルリ	9	2	6	1
カツレツ	4	1	1	2	カルスト	43	13	2	28	ガルシン	24	4	6	14	クランケ	45	13	29	3	ケルビム	10	3	6	1	コロイド	24	8	9	7
カデンツ	5	1	1	3	カルタゴ	23	13	9	1	ガルソン	29	4	4	21	クランプ	46	13	29	4	ケルビン	14	3	6	5	コロセオ	11	8	2	1
カトレア	6	1	2	3	カルタン	37	13	9	15	ガルダン	15	4	3	8	クリスト	39	5	6	28	ケロイド	18	2	9	7	コロヌス	10	8	1	1
カナウジ	5	3	1	1	カルテル	25	13	3	9	ガルロン	27	4	1	22	クリビア	19	5	2	12	ケロシン	21	2	5	14	コロネル	16	8	1	7
カナキン	16	3	1	12	カルデラ	19	13	3	3	ガレオン	18	2	3	13	クリミア	11	5	1	5	ケンダラ	10	2	6	2	コロブス	12	8	1	3
カナリア	23	3	3	17	カルトン	57	13	13	31	ガレノス	6	2	1	3	クリムト	8	5	2	1	ケンペル	13	2	8	3	コロラド	10	8	1	1
カニシカ	7	2	2	3	カルミア	24	13	6	5	ガロンヌ	12	1	9	2	クリンチ	23	5	14	4	ゲオルゲ	3	1	1	1	コロンブ	18	8	9	1
カニング	16	2	2	12	カルミン	29	13	6	10	ガンジス	8	3	4	1	クルトン	45	1	13	31	ゲネプロ	7	1	1	5	コロンボ	18	8	9	1
カネキン	15	1	2	12	カルメラ	20	13	6	1	ガンバン	11	3	5	3	クレオン	23	7	3	13	ゲバルト	10	1	2	7	コンサル	17	9	6	2
カバニス	6	2	1	3	カルメル	24	13	6	5	ガンビア	20	3	5	12	クレソン	29	7	1	21	ゲルニカ	12	3	4	5	コンスル	18	9	7	2
カバリエ	6	2	1	3	カルメン	26	13	6	7	キアズマ	4	1	1	2	クレバス	13	7	1	5	ゲルピン	8	3	1	4	コンソメ	13	9	3	1
カピタル	16	3	2	11	カレツキ	7	5	1	1	キオスク	6	1	1	4	クレバス	15	7	2	6	ゲルマン	25	3	4	18	コンタツ	23	9	13	1
カピタン	20	3	2	15	カレリア	24	5	2	17	キシラン	18	2	1	15	クレブス	13	7	3	3	ゲレイン	19	2	1	16	コンテナ	18	9	7	2
カピバラ	5	3	1	1	カレワラ	7	5	1	1	キシレン	11	2	1	8	クレマン	27	7	2	18	ゲレンデ	20	2	17	1	コントラ	26	9	12	5
カフカズ	4	2	1	1	カレンズ	29	5	17	7	キセニア	10	2	1	7	クレヨン	12	7	1	4	コイサン	10	1	1	8	コンドル*26	9	12	5	
カフタン	19	2	2	15	カレント	55	5	17	33	キセノン	8	2	2	4	クロトン	37	3	3	31	コカイン	20	1	3	16	コンパス	25	9	10	6
カプラル	12	1	4	7	カロチン	23	2	3	18	キノリン	29	1	2	26	クロノス	7	3	1	3	コサイン	20	1	3	16	コンボイ	17	9	7	1
カプセル	6	1	2	3	カロメル	8	2	1	5	キプロス	10	1	3	6	クロレラ	6	3	2	1	コストレ	17	2	13	2	ゴスペル	5	1	1	3

Table 1—3 カタカナ4文字表記語(word)のカタカナbigram頻度(bT)及び位置毎のbigram頻度(b1, b2, b3)

word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3
ゴブラン	20	1	4	15	サンボル	19	10	7	2	シンブル	17	6	7	4	ステレオ	7	3	2	2	セビリア	20	1	2	17
ゴムルカ	6	1	2	3	サンルイ	12	10	1	1	シンボル	15	6	7	2	ストマイ	7	3	2	2	セミプロ	7	1	1	5
ゴルゴタ	9	3	5	1	サンレモ	13	10	2	1	ジオイド	10	2	1	7	ストレス	13	3	2	8	セメント	37	1	3	33
ゴルゴン	16	3	5	8	ザクセン	10	1	3	6	ジオラマ	6	2	1	3	ストロボ	8	3	4	1	セラヒン	3	1	1	1
ゴルドン	10	3	3	4	ザグレブ	5	1	2	2	ジグザグ	3	1	1	1	スハルト	9	1	1	7	セリウム	32	2	13	17
ゴロフク	3	1	1	1	ザハロフ	8	1	2	5	ジストマ	15	1	13	1	スパイク	12	3	5	4	セリシン	19	2	3	14
ゴンゴラ	9	2	5	2	ザビエル	12	1	2	9	ジパング	14	1	1	12	スパイス	14	3	5	6	セルバス	11	2	4	5
ゴンドラ	20	2	12	6	ザベリヨ	8	1	6	1	ジルコン	25	2	5	18	スパルタ	5	3	1	1	セルビア	20	2	6	12
サイクル	13	6	2	5	ザムボア	5	1	1	3	ジルソン	27	2	4	21	スピネル	12	4	1	7	セレクト	4	2	1	1
サイゴン	15	6	1	8	ザンビア	20	3	5	12	ジレンマ	19	1	17	1	スピノザ	7	4	2	1	セレベス	5	2	1	2
サイパン	15	6	2	7	ザンベジ	8	3	4	1	ジロンド	29	1	9	19	スピノラ	8	4	2	2	セロヤン	9	1	1	7
サイホン	10	6	1	3	ザンボア	13	3	7	3	ジンクス	13	3	6	4	スピリツ	6	4	1	1	センサス	11	2	6	3
サイヤン	16	6	3	7	シアトル	18	1	4	13	ジンゲル	12	3	5	4	スペイン	20	1	3	16	センダラ	10	2	6	2
サイレン	17	6	3	8	シエシエ	4	1	2	1	ジンメル	10	3	2	5	スポイト	11	3	3	5	ゼネコン	22	3	1	18
サウンド	29	1	9	19	シガテラ	5	1	1	3	スアレス	10	1	1	8	スポイル	10	3	3	4	ゼネスト	35	3	4	28
サガレン	10	1	1	8	シグナル	5	1	2	2	スイフト	9	2	2	5	スポンジ	11	3	1	7	ゼネラル	13	3	3	7
サクソン	28	1	6	21	シシフス	5	1	1	3	スイング	20	2	6	12	スマイル	9	3	2	4	ゼラチン	22	1	3	18
サスプロ	8	1	2	5	シスチン	23	2	3	18	スカウト	10	5	1	4	スマトラ*	9	3	1	5	ソジウム	22	1	4	17
サハリン	29	2	1	26	システム	11	2	7	2	スカラベ	8	5	1	2	スマラン	20	3	2	15	ソナチネ	3	1	1	1
サハロフ	9	2	2	5	シチリア	19	1	1	17	スカルノ	10	5	3	2	スメタナ	5	1	1	3	ソノブイ	3	1	1	1
サバラン	19	2	2	15	シトシン	17	2	1	14	スカロン	32	5	5	22	スライス	28	7	15	6	ソビエト	4	1	2	1
サバンナ	5	2	1	2	シトロン	28	2	4	22	スカンク	17	5	4	8	スライド	29	7	15	7	ソプラノ	6	1	4	1
サフラン	18	1	2	15	シナプス	7	3	1	3	スキタイ	9	2	1	6	スライム	23	7	15	1	ソマリア	21	1	3	17
サボニン	12	1	1	10	シナモン	10	3	1	6	スキピオ	5	2	1	2	スラスト	42	7	7	28	ソムリエ	5	1	1	3
サマリア	21	1	3	17	シナリオ	11	3	3	5	スクイズ	7	4	1	2	スラバヤ	13	7	5	1	ソラニン	15	1	4	10
サミング	17	1	4	12	シニカル	11	2	1	8	スクエア	7	4	1	2	スラング	48	7	29	12	ソリスト	36	2	6	28
サムソン	24	1	2	21	シニスム	4	2	1	1	スクラム	11	4	3	4	スランプ	40	7	29	4	ソリトン	36	2	3	31
サラゴサ	10	5	4	1	シネスコ	14	2	4	8	スクリバ	8	4	3	1	スリナム	4	1	1	2	ソレント	51	1	17	33
サラザル	7	5	1	1	シネラマ	8	2	3	3	スコバス	10	3	1	6	スルタン	25	1	9	15	ソロモン	8	1	1	6
サラセン	13	5	2	6	シノニム	5	1	1	3	スコリア	21	3	1	17	スワトウ	4	2	1	1	ソンコイ	7	1	5	1
サラミス	10	5	2	3	シベリア	24	1	6	17	スコンク	13	3	2	8	スワビア	15	2	1	12	ゾルレン	11	1	2	8
サラワク	8	5	2	1	シムノン	6	1	1	4	スタイル	19	11	4	4	ズルチン	23	1	4	18	タイタイ	14	6	2	6
サリエリ	7	1	5	1	シモンズ*	10	1	2	7	スタイン	31	11	4	16	ズンガル	11	1	7	3	タイタン	23	6	2	15
サルゴン	18	5	5	8	シラクサ	9	2	6	1	スタウト	16	11	1	4	セイウチ	8	4	3	1	タイトル	20	6	1	13
サルタン	29	5	9	15	シラブル	12	2	2	8	スタジオ	15	11	1	3	セイラス	16	4	4	8	タイピン	11	6	1	4
サルデス	13	5	3	5	シリアス	17	4	8	5	スタミナ	15	11	2	2	セイレン	15	4	3	8	タイペイ	10	6	1	3
サルトル	31	5	13	13	シリウス	29	4	13	12	スタメン*	19	11	1	7	セイロン	33	4	7	22	タイムズ	11	6	2	3
サルビア	23	5	6	12	シリコン	26	4	4	18	スタンザ	21	11	9	1	セカント	39	2	4	33	タウンズ	17	1	9	7
サロニカ	8	1	2	5	シリング	30	4	14	12	スタンス	31	11	9	11	セカンド	25	2	4	19	タナグラ	5	1	1	3
サンダル	17	10	6	1	シルミン	17	1	6	10	スタント	53	11	9	33	セコイア	10	3	1	6	タバスコ	10	1	1	8
サントス*	25	10	12	3	シレジア	6	1	3	2	スタンド	39	11	9	19	セコハン	7	3	1	3	タピオカ	3	1	1	1
サントメ	23	10	12	1	シロホン	5	1	1	3	スタンプ	24	11	9	4	セコンド	24	3	2	19	タフガイ	4	1	2	1
サントラ	27	10	12	5	シンクロ	16	6	6	4	ステルブ	6	2	2	2	セゴビア*	14	1	1	12	タムタム	6	1	1	4
サンバン	27	10	10	7	シングル	18	6	6	6	ステレン	12	2	2	8	セザンヌ	4	1	1	2	タラント	63	1	29	33
サンプル	21	10	7	4	シンコナ	12	6	5	1	ステビア	16	3	1	12	セシウム	20	1	2	17	タリウム	31	1	13	17
サンホセ	12	10	1	1	シンバル	15	6	5	4	ステリン	30	3	1	26	セネガル	5	1	1	3	タルカン	18	2	5	11
																				テアトル	19	2	4	13

Table 1—4　カタカナ４文字表記語(word)のカタカナbigram頻度(bT)及び位置毎のbigram頻度(b1，b2，b3)

word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3
テアトロ	10	2	4	4	トムソン	25	2	2	21	ナイマン	26	3	5	18	ノンポリ	9	3	4	2	バイロン	38	9	7	22	バイント	44	5	6	33
テオドラ	8	1	1	6	トラスト	41	6	7	28	ナイロビ	11	3	7	1	ハイエク	19	12	6	1	バウンド	29	1	9	19	バウンド*29	1	9	19	
テキサス	7	2	2	3	トラブル	16	6	2	8	ナイロン	32	3	7	22	ハイエナ	19	12	6	1	バオダイ	4	1	1	2	バサデナ	3	1	1	1
テキスト	31	2	1	28	トラベル	12	6	1	5	ナウマン	22	1	3	18	ハイカラ	18	12	2	4	バカンス	16	1	4	11	バスカル*14	3	3	8	
テクスト	32	1	3	28	トランク	43	6	29	8	ナサコム	5	1	1	3	ハイテク	15	12	2	1	バシリカ	8	1	2	5	バスコリ	7	3	2	2
テセウス	14	1	1	12	トランス*46	6	29	11		ナチズム	9	1	2	6	ハイデス	20	12	3	5	バジリコ	3	1	1	1	バステル	19	3	7	9
テトロン	27	1	4	22	トランプ*39	6	29	4		ナトルプ	5	1	3	1	ハイドン	19	12	3	4	バソリス	11	1	2	8	バソコン	20	1	1	18
テナント	36	1	2	33	トリウム	34	4	13	17	ナフキン	15	2	1	12	ハイフン	15	12	2	1	バタイユ	9	3	4	2	バテント	36	1	2	33
テニソン	23	1	1	21	トリトン*38	4	3	31		ナフテン	9	2	2	5	ハイミス	16	12	1	3	バタビヤ	5	3	1	1	バトリキ	7	2	4	1
テフロン	25	1	2	22	トリプル	10	4	2	4	ナプキン	14	1	1	12	ハイムズ	17	12	2	3	バタリア	22	3	2	17	バトロン	28	2	4	22
テヘラン	17	1	1	15	トリポリ	7	4	1	2	ナホトカ	3	1	1	1	ハイメン	21	12	2	7	バチカン	15	3	1	11	バノラマ	6	1	2	3
テムジン	14	1	3	10	トルエン	6	1	2	3	ナポコフ	5	1	1	3	ハイラル	23	12	4	7	バチスト	32	3	1	28	ババイア	13	2	5	6
テラピア	4	1	2	1	トレバン	15	6	2	7	ナミビア	14	1	1	12	ハイレグ	16	12	3	1	バチルス	16	3	2	11	ババイン	23	2	5	16
テリアカ	10	1	8	1	トレモロ	8	6	1	1	ナルシス	12	1	6	5	ハチソン	23	1	1	21	バテレン	11	1	2	8	バビルス	13	1	1	11
テルペン	10	1	4	5	トレルチ	13	6	6	1	ナンキン	18	2	4	12	ハドソン	24	2	1	21	バドリオ	8	1	2	5	バブリカ	10	1	4	5
テレコム	8	4	1	3	トレンチ	27	6	17	4	ナンセン	11	2	3	6	ハドロン	26	2	2	22	バナジン	12	1	1	10	バライゾ	22	6	15	1
テレジオ	10	4	3	3	トレント	56	6	17	33	ニアミス	6	1	2	3	ハバネラ	4	2	1	1	バニヤン	10	2	1	7	バラゴム	11	6	4	1
テレマン	24	4	2	18	トレンド	42	6	17	19	ニカイア	10	1	3	6	ハバハバ	4	2	1	1	バニリン	31	2	3	26	バラソル	12	6	3	3
テレミン	17	4	3	10	トロイア	19	4	9	6	ニクソン	29	2	6	21	ハビアン	14	1	2	11	バヌアツ	3	1	1	1	バラビン	12	6	2	4
テンソル	10	4	3	3	トロイカ	17	4	9	4	ニクロム	6	2	2	2	ハプテン	7	1	1	5	ババロア	3	1	1	1	バラボラ	10	6	2	2
テンパイ	16	4	10	2	トロイデ	14	4	9	1	ニコシア	12	4	1	7	ハミング	17	1	4	12	バビルサ	4	2	1	1	バラレル	10	6	1	3
テンプラ	13	4	7	2	トロント	46	4	9	33	ニコチン	23	4	1	18	ハムスン	5	2	2	1	バビロン	25	2	1	22	バルタイ	18	3	9	6
テンペラ	16	4	8	4	トンキン	20	4	4	12	ニコライ	11	4	2	5	ハムラビ	5	2	2	1	バフチン	20	1	1	18	バルチア	9	3	4	2
デカダン	13	4	1	8	トンコリ	11	4	5	2	ニコラス	14	4	2	8	ハモニカ	8	1	2	5	バラスト	38	3	7	28	バルミラ	10	3	6	1
デカリン	32	4	2	26	トンネル	14	4	3	7	ニトリル	7	1	4	2	ハライソ	18	2	15	1	バラモン	10	3	1	6	バレルモ	8	1	6	1
デカルト	14	4	3	7	トンボロ	12	4	7	1	ヌルハチ	3	1	1	1	ハラカン	18	2	5	11	バランス	43	3	29	11	バロチン	22	1	3	18
デカログ	12	4	5	3	ドアマン	20	1	1	18	ネオジム	3	1	1	1	ハリコフ	8	1	4	3	バリウム	36	6	13	17	バワフル	5	1	1	3
デキウス	14	1	1	12	ドクトル	19	1	5	13	ネクスト	35	4	3	28	ハルビン	12	1	6	5	バリエテ	12	6	5	1	バンクロ	17	7	6	4
デコルテ	4	1	1	2	ドスキン	17	1	4	12	ネクタイ	16	4	6	6	ハレルヤ	9	1	6	2	バリカン	20	6	3	11	バンゲア	13	7	5	1
デザイン	19	1	2	16	ドミタス	9	4	2	3	ネクタル	21	4	6	11	ハロゲン	5	1	1	3	バリケン	17	6	4	7	バンソリ	11	7	3	1
デシベル	7	1	1	5	ドミニカ*11	4	2	5		ネクトン	40	4	5	31	ハンカオ	15	8	6	1	バリコン	28	6	4	18	バンドラ	25	7	12	6
デジタル	13	1	1	11	ドミニコ	7	4	2	1	ネグリト	5	1	3	1	ハンカチ	15	8	6	1	バリトン	40	6	3	31	バンバス	23	7	10	6
デスピオ	5	1	2	2	ドミンゴ	9	4	4	1	ネストル	27	1	13	13	ハングル	20	8	6	6	バルカン	20	4	5	11	バンバン	24	7	10	7
デタント	43	1	9	33	ドライブ	21	5	15	1	ネフロン	25	1	2	22	ハンケチ	12	8	3	1	バルコン	27	4	5	18	バンプス	17	7	7	3
デバイス	9	1	2	6	ドラクマ	13	5	6	2	ネメシス	8	1	2	5	ハンサム	17	8	6	3	バルサム	11	4	4	3	バヴロフ	9	2	2	5
デミタス	6	1	2	3	ドラゴン	17	5	4	8	ネルソン	26	1	4	21	ハンスト	43	8	7	28	バルボア	8	4	1	3	バヴロワ	5	2	2	1
デメテル	11	1	1	9	ドラセナ	8	5	2	1	ネレウス	16	1	3	12	ハンドル	25	8	12	5	バンコク	12	6	5	1	ヒアデス	7	1	1	5
デラシネ	5	1	3	1	ドラフト	13	5	3	5	ノイマン	25	2	5	18	ハンブル*18	8	2	8		バンスリ	14	6	7	1	ヒイデス	9	1	3	5
トイメン	10	1	2	7	ドリアン	22	3	8	11	ノイロン	31	2	7	22	バイアス	21	9	7	5	バンタム	23	6	13	4	ヒクソス	9	1	6	2
トカマク	3	1	1	1	ドリブル	12	3	1	8	ノウハウ	3	1	1	1	バイエル	24	9	6	9	バンテン	18	6	7	5	ヒストン	45	1	13	31
トキシン	19	1	4	14	ドリンク	25	3	14	8	ノエシス	8	1	2	5	バイソン	32	9	2	21	バンドン	22	6	12	4	ヒマラヤ	4	1	2	1
トナカイ	3	1	1	1	ドルトン	47	3	13	31	ノミナル	4	1	1	2	バイバイ	15	9	3	3	バンヤン	14	6	1	7	ヒメネス	5	1	1	3
トピリシ	4	1	2	1	ドルメン	16	3	6	7	ノルネン	7	2	3	2	バイパス	17	9	2	6	バイカル	15	5	2	8	ヒヤヒヤ	3	1	1	1
トポガン	8	1	1	6	ドルラル	13	3	3	7	ノルマル	9	2	4	3	バイブル	18	9	1	8	バイスケ	10	5	4	1	ヒルジン	15	1	4	10
トミズム	8	1	1	6	ドンタク	17	2	13	2	ノンブル	13	3	2	8	バイヨン	16	9	3	4	バイソン	28	5	2	21	ヒロイン	27	2	9	16
トムセン	9	2	1	6	ドンマイ	7	2	3	2	ノンプロ	15	3	7	5	バイラス	21	9	4	8	バイロン	34	5	7	22	ヒロポン	8	2	1	5

Table 1—5 カタカナ4文字表記語(word)のカタカナbigram頻度(bT)及び位置毎のbigram頻度(b1, b2, b3)

word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3
ビアフラ	3	1	1	1	フラビン	27	16	6	5	ブルンジ	17	7	3	7	ヘリオス	10	2	7	1	ペンシル	7	4	1	2	ポシブル	10	1	1	8
ビオチン	21	2	1	18	フラボン	21	16	2	3	ブレアル	11	4	3	4	ヘルニア	14	3	4	7	ペンタン	32	4	13	15	ポズナニ	3	1	1	1
ビオロン	25	2	1	22	フラマン	35	16	1	18	ブレスト*	35	4	3	28	ヘルペス	8	3	4	1	ペンバル	15	4	10	1	ポツダム	4	1	1	2
ビジネス	5	1	1	3	フランキ	46	16	29	1	ブレヒト	6	4	1	1	ヘルメス	10	3	6	1	ホアチン	20	1	1	18	ポドゾル	3	1	1	1
ビステキ	12	3	7	2	フランク*	53	16	29	8	ブレンド	40	4	17	19	ヘレネス	6	1	2	3	ホイスト*	33	1	4	28	ポプリン	31	1	4	26
ビストロ	20	3	13	4	フランケ	48	16	29	3	ブロンズ	19	3	9	7	ヘロイン	26	1	9	16	ホスゲン	7	3	1	3	ポラリス	11	1	2	8
ビスマス	8	3	2	3	フランコ	46	16	29	1	ブロンテ	13	3	9	1	ヘンデル	11	1	8	2	ホステス	12	3	7	2	ポリエン	9	1	5	3
ビタミン	13	1	2	10	フランジ	52	16	29	7	ブロンド	31	3	9	19	ベクトル	20	2	5	13	ホスピス	6	3	2	1	ポロシモ	7	1	5	1
ビニロン	24	1	1	22	フランス*	56	16	29	11	ブンゼン	11	1	4	6	ベクレル*	8	2	3	3	ホチキス	5	1	1	3	ポンカン	21	4	6	11
ビピンバ	7	1	3	3	フランツ	48	16	29	3	プチブル	10	1	1	8	ベゴニア	9	1	1	7	ホトアラ	3	1	1	1	ポンキン	20	4	4	12
ビフテキ	5	1	2	2	フリアエ	12	3	8	1	プネウマ	3	1	1	1	ベスピオ	3	1	1	1	ホノルル	4	1	2	1	ポンペイ	15	4	8	3
ビブリオ	8	1	2	5	フリンジ	24	3	14	7	プライス	30	9	15	6	ベテラン	17	1	1	15	ホフマン	20	1	1	18	ポンポン	13	4	4	5
ビリオン	22	2	7	13	フリント	50	3	14	33	プライド	31	9	15	7	ベトナム	5	2	1	2	ホメイニ	4	2	1	1	マイアミ	15	7	7	1
ビリケン	13	2	4	7	フルトン	46	2	13	31	プラウダ	15	9	5	1	ベトミン	13	2	1	10	ホメロス	9	2	1	6	マイクロ	13	7	2	4
ビルゼン	11	2	3	6	フルンゼ	6	2	3	1	プラサド	11	9	1	1	ベナレス	10	1	1	8	ホモニム	6	1	2	3	マイコン	27	7	2	18
ビルバオ	7	2	4	1	フレオン	21	5	3	13	プラズマ	14	9	3	2	ベネチア	4	1	1	2	ホラズム	10	1	3	6	マイシン	23	7	2	14
ビアノラ	4	1	1	2	フレスコ	16	5	3	8	プラチナ	13	9	3	1	ベランダ	36	1	29	6	ホルスト	34	4	2	28	マイナス	12	7	2	3
ビクルス	14	1	2	11	フレネル	14	5	2	7	プラトン	43	9	3	31	ベルゲン	8	4	1	3	ホルチン	26	4	4	18	マイルド	14	7	4	3
ビサネロ	3	1	1	1	フレンチ	26	5	17	4	プランク	46	9	29	8	ベルダン	15	4	3	8	ホルベア	8	4	3	1	マインツ	16	7	6	3
ビザバイ	4	1	1	2	フレンド	41	5	17	19	プラント	71	9	29	33	ベルベル	12	4	3	5	ホルモン	11	4	1	6	マウマウ	8	4	3	1
ビストル	28	2	13	13	フロイス	21	6	9	6	プリズム	13	6	1	6	ベルリン	31	4	1	26	ホレリス	11	1	2	8	マウリヤ	6	4	1	1
ビストン	46	2	13	31	フロイト	20	6	9	5	プリマス	10	6	1	3	ベレンス	29	1	17	11	ホワイエ	7	2	4	1	マウント	46	4	9	33
ビニオン	19	1	5	13	フロスト	36	6	2	28	プリムラ	9	6	2	1	ベンガジ	16	8	7	1	ホワイト	11	2	4	5	マウンド	32	4	9	19
ビノキオ	3	1	1	1	フロリダ	11	6	4	1	プリレコ	13	6	3	4	ベンガラ	16	8	7	1	ホンゲイ	9	3	5	1	マオトン	33	1	1	31
ビベリン	28	1	1	26	フロリン	36	6	4	26	プリンス	31	6	14	11	ベンガル	18	8	7	3	ホンコン	26	3	5	18	マカロニ	8	2	5	1
ビラニア	12	1	4	7	フロント	48	6	9	33	プリント	53	6	14	33	ベンサム	17	8	6	3	ホンバン	20	3	10	7	マカロフ	12	2	5	5
ビリオド	11	3	7	1	プイエス	13	2	6	5	プレスト	35	4	3	28	ベンサン	22	8	6	8	ボイルド	8	1	4	3	マガジン	12	1	1	10
ビリジン	15	3	2	10	プイヨン	9	2	3	4	プレハブ	6	4	1	1	ベンジン	22	8	4	10	ボウエン	5	1	1	3	マキシム	6	1	4	1
ビリング	29	3	14	12	プギウギ	3	1	1	1	プレブス	10	4	3	3	ベンゼン	18	8	4	6	ボサノバ	3	1	1	1	マクニン	13	2	1	10
ビルゼン	10	1	3	6	プダガヤ	3	1	1	1	プレミア	12	4	3	5	ベントス	23	8	12	3	ボストン	46	2	13	31	マクベス	5	2	1	2
ピロシキ	7	1	5	1	プライド	30	8	15	7	プロシア	20	8	5	7	ペイント	40	1	6	33	ボスニア	10	2	1	7	マグリブ	7	2	3	2
ピンイン	19	2	1	16	プラウス	25	8	5	12	プロセス	12	8	2	2	ペガソス	4	1	1	2	ボツワナ	3	1	1	1	マグレブ	6	2	2	2
ピンポン	11	2	4	5	プラウン*	15	8	5	2	プロトン	42	8	3	31	ペクチン	23	1	4	18	ボヘミア	7	1	1	5	マサリク	4	1	2	1
フクシア	12	3	2	7	プラジル	10	8	1	1	プロパン	16	8	1	7	ペダント	35	1	1	33	ポリビア	15	1	2	12	マザラン	17	1	1	15
フクシン	19	3	2	14	プランク	45	8	29	8	プロペラ	13	8	1	4	ペトルス	15	1	3	11	ボルシチ	12	5	6	1	マスカラ	11	4	3	4
フクリン	32	3	3	26	プランチ*	41	8	29	4	プロミン	19	8	1	10	ペナント	36	1	2	33	ボルジア	11	5	4	2	マスコミ	8	4	2	2
フズリナ	4	1	1	2	プラント	70	8	29	33	プロリン	38	8	4	26	ペネロペ	4	1	1	2	ボルゾイ	8	5	2	1	マスタバ	9	4	4	1
フセイン	20	1	3	16	プランド	56	8	29	19	プロレス	18	8	2	8	ペプシン	19	4	1	14	ボルネオ	9	5	3	1	マスチフ	8	4	3	1
フビライ	8	1	2	5	プリアン	21	2	8	11	ヘアケア	5	3	1	1	ペプチド	6	4	1	1	ボルヘス	9	5	3	1	マズルカ	5	1	1	3
フフホト	4	1	1	2	プリテン*	8	2	1	5	ヘアダイ	6	3	1	2	ペプトン	37	4	2	31	ボロジン	12	1	1	10	マゼラン	18	2	1	15
フライス	37	16	15	6	プルゴス	13	7	5	1	ヘアピン	8	3	1	4	ペプラム	12	4	4	4	ボンゴレ	9	3	5	1	マゼンタ	4	2	1	1
フライズ	33	16	15	2	プルゾン	12	7	2	3	ヘキサン	11	1	2	8	ペラグラ	5	1	1	3	ボンベイ	8	3	4	1	マタロス	9	1	2	6
フライト	36	16	15	5	プルトン	51	7	13	31	ヘクトル	19	1	5	13	ペリカン	15	1	3	11	ボンボン	13	3	7	3	マドラス	12	3	1	8
フラスコ	31	16	7	8	プルネイ	11	7	3	1	ヘパリン	28	1	1	26	ペルシア	15	2	6	7	ポイント	40	1	6	33	マドロス	11	3	2	6
フラソコ	20	16	3	1	プルバキ	12	7	4	1	ヘプライ	10	1	4	5	ペルソナ	7	2	4	1	ボグロム	4	1	1	2	マドンナ	6	3	1	2
フラネル	24	16	1	7	プルペン	16	7	4	5	ヘリウム	32	2	13	17	ペンギン	7	4	1	2	ボコペン	7	1	1	5	マナスル	4	1	1	2

Table 1—6　カタカナ４文字表記語(word)のカタカナbigram頻度(bT)及び位置毎のbigram頻度(b1，b2，b3)

word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3	word	bT	b1	b2	b3
マニオク	8	2	5	1	ミノルカ	6	1	2	3	モスレム	5	3	1	1	ラジウム	26	5	4	17	リンネル	12	2	3	7	ロマンス	15	1	3	11
マニプリ	5	2	1	2	ミヘルス	13	1	1	11	モナリザ	5	1	3	1	ラジカセ	9	5	3	1	ルアンダ	8	1	1	6	ロムルス	14	1	2	11
マヌカン	13	1	1	11	ミメシス	8	1	2	5	モノクル	8	2	1	5	ラジカル	16	5	3	8	ルクソル	10	1	6	3	ロリコン	23	1	4	18
マネキン	15	1	2	12	ミラクル	12	1	6	5	モノラル	11	2	2	7	ラジコン	24	5	1	18	ルジチカ	3	1	1	1	ロンドン*	17	1	12	4
マラウイ	13	7	5	1	ミリオン	21	1	7	13	モメント	37	1	3	33	ラスキン	17	1	4	12	ルチズム	9	1	2	6	ワイエス	13	2	6	5
マラカス	15	7	5	3	ミルトン	45	1	13	31	モラエス	7	1	1	5	ラセイタ	7	1	3	3	ルバシカ	5	1	1	3	ワイルド*	9	2	4	3
マラソン	31	7	3	21	ミレトス	5	1	1	3	モリソン	23	1	1	21	ラテルネ	3	1	1	1	ルビコン	20	1	1	18	ワクチン	23	1	4	18
マラトン	41	7	3	31	ミンスク	12	1	7	4	モルガン	14	5	3	6	ラノリン	29	1	2	26	ルビナス	5	1	1	3	ワグネル	9	1	1	7
マラバル	16	7	5	4	ムスカリ	8	2	3	3	モルジヴ	10	5	4	1	ラバウル	4	1	2	1	ルフラン	18	1	2	15	ワセリン	28	1	1	26
マラリア	26	7	2	17	ムスリム	6	2	3	1	モルタル	25	5	9	11	ラプラス	14	2	4	8	ルブラン	20	1	4	15	ワトソン	23	1	1	21
マラルメ	10	7	2	1	ムデハル	4	1	1	2	モルトケ	19	5	13	1	ラプラタ	7	2	4	1	ルムンバ	5	1	1	3	ワニリン	30	1	3	26
マリケン	14	3	4	7	ムニエル	12	1	2	9	モルヒネ	7	5	1	1	ラベイカ	6	1	1	4	ルモンド	22	1	2	19	ワラント	63	1	29	33
マリタン	19	3	1	15	ムバラク	4	1	2	1	モレアス	9	1	3	5	ラマダン	11	2	1	8	ルワンダ	8	1	1	6	ワルラス	12	1	3	8
マリンバ	20	3	14	3	ムルナウ	3	1	1	1	モロトフ	6	1	3	2	ラマルク	6	2	2	2	ルンペン	14	1	8	5	ワングル	16	4	6	6
マルクス	13	8	1	4	メガトン	35	3	1	31	モンゴル	9	3	5	1	ラメトリ	3	1	1	1	レアリテ	3	1	1	1	ワンゲル	13	4	5	4
マルコス	14	8	5	1	メガホン	7	3	1	3	モンタナ	19	3	13	3	ララバイ	9	1	5	3	レイオフ	5	1	3	1	ワンタン	32	4	13	15
マルコフ	16	8	5	3	メガロバ	6	3	1	2	モンバサ	9	3	5	1	ランキン	24	8	4	12	レオポン	7	1	1	5	ワンマン	25	4	3	18
マルサス	15	8	4	3	メキシコ	6	1	4	1	ヤンゴン	17	4	5	8	ランケン	18	8	3	7	レギンス	13	1	1	11					
マルセル	12	8	1	3	メサイア	10	1	3	6	ヤンセン	13	4	3	6	ランスロ	16	8	7	1	レクラム	8	1	3	4					
マルタン	32	8	9	15	メシアン	14	1	2	11	ヤンバン	12	4	5	3	ランタナ	24	8	13	3	レグミン	13	2	1	10					
マルトノ	22	8	13	1	メジアン	14	1	2	11	ヤンフス	11	4	4	3	ランタン*	36	8	13	15	レグルス	14	2	1	11					
マルメロ	15	8	6	1	メフメト	3	1	1	1	ユトリロ	6	1	4	1	ランダウ	15	8	6	1	レゲンダ	8	1	1	6					
マレルブ	9	1	6	2	メラニン	16	2	4	10	ユニオン	20	2	5	13	ランダム	16	8	6	2	レザノフ	3	1	1	1					
マロニエ	4	1	2	1	メラミン	14	2	2	10	ユニセフ	5	2	2	1	ランビキ	14	8	5	1	レシチン	20	1	1	18					
マンガン*	21	8	7	6	メリアム	16	6	8	2	ユネスコ	13	1	4	8	リウマチ	5	1	3	1	レスポス	4	1	2	1					
マンテル	24	8	7	9	メリエス	16	6	5	5	ユピテル	11	1	1	9	リエゾン	5	1	1	3	レトルト	11	1	3	7					
マンデラ	19	8	8	3	メリケン	17	6	4	7	ユマニテ	3	1	1	1	リカオン	15	1	1	13	レニウム	20	1	2	17					
マントル	33	8	12	13	メリスマ	14	6	6	2	ユンケル	5	1	3	1	リグニン	12	1	1	10	レバノン	6	1	1	4					
マンナン	14	8	3	3	メリヤス	9	6	2	1	ヨアヒム	3	1	1	1	リスボン	7	2	2	3	レプトン	35	2	2	31					
マンネリ	12	8	3	1	メリンス	31	6	14	11	ヨジウム	22	1	4	17	リスリン	31	2	3	26	レプリカ	11	2	4	5					
マンモス	13	8	3	2	メルトン	47	3	13	31	ヨセフス	6	2	1	3	リタイア	11	1	4	6	レマルク	5	1	2	2					
マンモン	17	8	3	6	メルヘン	7	3	3	1	ヨセミテ	4	2	1	1	リチウム	19	1	1	17	レミング	17	1	4	12					
ミエリン	28	1	1	26	メルラン	21	3	3	15	ヨルダン	12	1	3	8	リトマス	6	1	2	3	レンタル	26	2	13	11					
ミオシン	17	1	2	14	メレンゲ	20	2	17	1	ライエル	21	6	6	9	リヒテル	11	1	1	9	レンヒイ	6	2	2	2					
ミカエル	11	1	1	9	メレンス	30	2	17	11	ライオン	22	6	3	13	リビング	16	1	3	12	ロイシン	18	2	2	14					
ミクスト	33	2	3	28	メンゼス	10	5	4	1	ライデン	13	6	3	4	リベラル	10	2	1	7	ロイヤル	7	2	3	2					
ミクロン	26	2	2	22	メンタル	29	5	13	11	ライバル	13	6	3	4	リベリア	25	2	6	17	ロカイユ	6	1	3	2					
ミコヤン	9	1	1	7	メンデル	15	5	8	2	ライヒイ	9	6	1	2	リポイド	11	1	3	7	ロケハン	5	1	1	3					
ミサイル	8	1	3	4	メンバオ	16	5	10	1	ライマン	29	6	5	18	リムジン	14	1	3	10	ロサリオ	8	1	2	5					
ミシガン	8	1	1	6	メンヒル	8	5	2	1	ラウタル	15	3	1	11	リモコン	21	2	1	18	ロザリオ	7	1	1	5					
ミタンニ	11	1	9	1	モイマン	25	2	5	18	ラウンジ	19	3	9	7	リモネン	5	2	1	2	ロジウム	23	2	4	17					
ミニコミ	7	3	2	2	モイライ	11	2	4	5	ラウンド	31	3	9	19	リライト	22	2	15	5	ロジカル	13	2	3	8					
ミニコン	23	3	2	18	モサラベ	4	1	1	2	ラクタム	12	2	6	4	リラダン	11	2	1	8	ロスタン	22	3	4	15					
ミニマム	6	3	2	1	モザイク	7	1	2	4	ラクトン	38	2	5	31	リリカル	13	2	3	8	ロストフ	18	3	13	2					
ミネソタ	4	2	1	1	モスクワ	6	3	2	1	ラコニア	9	1	1	7	リリヤン	11	2	2	7	ロストル	29	3	13	13					
ミネラル	12	2	3	7	モスリン	32	3	3	26	ラジアン	18	5	2	11	リンクス	12	2	6	4	ロベリア	24	1	6	17					

The Science of Reading, Vol. 43, No. 2 (1999)

翻訳

読みについて(3)*

アリゾナ大学　ケン・グッドマン**
加藤学園暁秀初等学校　横田玲子(訳)***

(Ⅳ) 熟達した読みはどのように働くか

前章まで，言語の様式がどのようにその機能と関係するかについて探ってきたが，これで我々は読むことと書くことのプロセスが，実際にどのように働くかについて，掘り下げていく用意ができた。この章では，あなたにいくつかの文章を読んでいただき，自分の読みのプロセスであなた自身が何を行っているか検証するとともに，読みがどのように働くかについて共に考えてみたいと思う。

まず，考えていただきたいのだが，もし読み書きのプロセスに関する研究が容易に可能だとしたら，なぜ誰もが，読み書きがどのように働くか，十分に，そして完璧に理解しないのであろうか。皮肉にも我々は，書かれた言語を理解することに慣れすぎ，読み書きをするときに何をどう行うかを考えることが逆に難しくなってしまったのである。読み書きのプロセスも，あまりにうまく働くため，実際に我々がそのプロセスの中で何を行っているかを分析するのが，かえって難しくなった。それはあたかも，車をまったく知らない人に，あなたがどうやって運転しているかを説明しようとすることのようだ。

だが我々の理解の過程に，何かちがうものがじゃまをしている。それは，言語に関する一連の誤った概念である。そのいくつかは言語に対する我々の経験がいかにそれと矛盾していようと，我々は正しいと思い続けている。この章では読みに関して我々が正しいと信じていることのいくつかが，間違っていることをあなた自身が自分で論証することになるだろう。

たとえば多くの人々は，読み手は単語の一字一字を見，それを何らかの方法で確認していると思っている。実際，今私がそう述べたので，あなたは単語の一文字一文字を個別に見ているところであろう。あなたは意識して分析的になったため，あなたの読みは一文字一文字を見て処理しているという視点を支持している。だが実際に何が起こっているかというと，あなたは読みのフォーカスをシフトさせたのである。つまり，わかるために読むという読みのプロセスをストップさせ，その意味づけのかわりに，一文字一文字に焦点を合わせるということにフォーカスをシフトさせた。あなたが目でみた単語一つ一つを，自分で本当に読んでいるだろうかと不思議に思い始る時，あなたはそれを行っている自分を発見する。そしてすでにあなたは識字力を備えており，誰かが話をしているのを聞く時，もし上記のように単語ごとに聞いていると考えたとしたら，耳で聞いている単語を頭の中でプリントされた文字にして思い浮かべるであろう。友人がしゃべるのを聞きながら，今私が述べたことを試していただきたい。

次の実験は読みのプロセスを明瞭にするのに役立つだろう。

---

* On reading.
** GOODMAN, Ken (University of Arizona)
*** YOKOTA, Rayco (Tranlator, Katoh Elementary School)

あなたが目で見たことと，
あなたが理解したこととはちがう！

実験方法

＊次の文章を一度だけ，たった一度だけ通して読む。
＊読み終えたらその上に何かを乗せて文章を隠す。
＊読んだ通り，覚えていることをすべて書き下ろす。
＊私がよいというまで絶対に文章を再読しない。

文章を読む前に，上記の説明を再読するのはかまわない。だがよく覚えておいていただきたい。たった一度だけ次の文章を読み，読んだ通りに思い出せることをすべて書き出すのである。これが大切なポイントだ。

The Boat in the Basement

A woman was building a boat in her basement. When she had finished the the boot, she discovered that it was too big to go though the door. So he had to take the boat a part to get it out. She should of planned ahead.

検討

この文章を理解するのに，困難なことはあっただろうか。実際には，結末がどうなるかを最後まで読む前にわかったにちがいない。つまり*予測可能*ということだ。この話は身近な状況であり，あなたはboat basements doorsそしてアマチュア建築家について知っているので，内容の概念把握は可能な範囲にある。だからこそ，何が起こるかを予測でき，話全体の意味を先取りすることができたのだ。

あなたが理解したことについて話を進める前に，あなたが書き下ろしたものについて少々注意深く検討してみたい。あなたは筆記体で書き下ろしただろうか，それともブロック体で書き下ろしただろうか。思い出していただきたい。私は*読んだこと*で覚えていることを，その通りに書き下ろしてほしいと伝えたはずである。ほとんどの読者が筆記体で書いたと思うが，もしあなたもそうしていたとすると，あなたの「読み」ということの解釈は，書式の様式は含まないということだ。なぜならあなたの書き下ろしたものは，あなたが読んだものとは似ていない。あなたが用いたその書体の選択は，取るに足りない現象ではない。つまりそれは，*あなたは実際に見たことではなく理解したことを書いたということを示しているからだ*。読みにおいてあなたの脳は，異なったプリント様式を同等価で扱い，実際に印刷された様式を知覚しながら，書き下ろすには自分に好ましい様式を用いた。様式というのは読みのプロセスで決して付随的なことではない。

さて，あなたのうち何人かは誤植と思われる何かに，いらいらしたことだろう。いくつ誤植があっただろうか。おっと！！　ここで文章を読み返してはだめだ！！　一つも誤植に気づかなかったとしても，心配無用――あなたはより熟達した読み手ということかもしれない。

boatと書いてあるべきところに，bootとあったのに気づいただろうか。実験方法の説明では，たった一度だけ読むといったはずだが，bootを見つけたとき，頭の中の混乱をはっきりさせるためにその部分を再読しなかっただろうか。読みにおける眼球活動に関する多数の研究があり，読み手の目が後戻りしないように訓練する機械まで考案されている。その機械は読んだ部分をどんどん消してしまうしくみである。だがここでのあなたの目の後戻り（或は，後戻りをしたくなった誘惑）が，読解を助けたのならば何ら問題になることではない。あなたは文章をわかるため必要があったので，読み返したのだ。

読者の何人かはbootと見たが，とりあえずboatと書き下ろしただろう。これは，あなたがboatと強く予測した結果，誤植を無視する決定を下したことを意味する。また，話の終り近くのheを，sheと変えて書き下ろした人が多いと思う。なぜならこの文章に男性は出てこないので，人称代名詞は女性をさすものが適当であることをあなたは知っていたからである。再び繰り返すが，これらのエラーに気づいたことは，あなたが意味を強く予測していたことと関係している。

boatとbootは似ているし，両方とも名詞である。同様に，heとsheも似ているし，共に代名詞である。だが，

以上の共通性にも関わらず，これらは意味を優先する強い予測にそぐわなかったので，このエラーに気づいた。我々の脳は読みにおいて，内容をわかることに焦点を当てている。このことは，文章の中のほかのエラーになぜ気づかなかったかを説明するのに，役立つかもしれない。

a partはapartとあるべきだった。冠詞のaと名詞のpartによって作り出される2単語の名詞句（a part）は，ここでは文法的に適切ではないし意味も通らない。あなたはこのエラーに気づいただろうか。もし見落としていたとしたら，それは自分で構成している意味に基づいて，話の中で次に何が来るかを強く予測していた為，見る必要があったのは，その予測を確認するのに十分な何かであったということだ。今私はここで予測，推理，確認について語っているのであって，単語の正確な鑑定について話しているのではないことに気づいていただきたい。つまり，あなたの読みのフォーカスは単語の確認ではなく，プリントをわかっていくことなのである。あなたは意味というものを構成しようとしているのだ。

さて，ここで先の実験文章を再読していただきたい。だが上記で述べた以外の，さらに3つあるエラーに気づかないとしても，がっかりしないでほしい。ゴラッシュによる研究では（1980）ほとんどの人が，無制限時間の中でさえ6つのエラー全部を見つけることはできなかったと報告している。

おそらくあなたは，4行目にthroughという単語を見たと思っただろうが，実際それは，thoughと書かれてある。書き下ろした時，「through the door」と書いただろうか。もしそうだとしたら，読みというものは，一つ一つの文字を見ていくことではなく，文字の連なりに気をつけていくことでもなく，そして単語が一体何であるかその文法的名称を決定しながら次の単語へ進んでいくことでもないという，さらなる証拠を提供しているわけだ。

読みとは，単に連続して単語を認識していくことではない。何かがあなたの読みを前へ進ませ，次に何が来るか予測するのをとてもうまく助けるので，あなたは意味へ移っていくためにプリントから単に*手掛かり*（キュー）を用いているだけなのである。あなたの脳は感覚の囚人ではなく，プロセスの責任者なのだ！ 脳は予測を打ち立て，目に入ってきたプリントの表面からのインプットを，内容理解のために用いながらあなたの目が前へ進むよう指示している。

このthroughとthoughの場合，あなたの脳はthroughにちがいないという強い確信があり，throughとthoughでは，一文字抜けただけでかなり発音がちがうということには気づかずに，文面に目を走らせていたのだ。あなたの脳はプリントの意味をわかり，予測を確認するのに十分なだけに知覚情報の総量を制限する手法を，すでに得ている。脳はこれら「ough」の付く単語の必要以上な情報は意味づけを遅らせることを知っている。あなたは自分の予測を確認するのに，十分なだけを見たのだ。throughとthoughでは，実際にはa partとapartや，bootとboatよりも大きな相違があるにもかかわらず，予測の中にある確信のために，このエラーに容易には気づかなかった。そして了解したことに強い確信があったので，脳は読み直すたびに確認できないことを拒み続けていたのだ。読みにおいて，あなたが見たと思ったことは，見たという事実よりも重要なのである。知覚は脳の活動である。つまり，感覚上のインプット—あなたの目が拾い上げた何かーを一つかそれ以上のスキーマ（すでに存在する知識の概要）に応用させることによって，脳は知覚活動をするのである。知覚とはあなたが見た何かを*考える*ことだ。

さて，文章の最後の行を見ていただきたい。あなたは「should've」のかわりに「should of」を見つけたことだろう。「should've」は「Should have」の短縮形である。*of*はその平凡な発音に対し，珍しいスペリングの単語である。（このことを簡単に確かめたいなら，だれかをつかまえてこのページにある〈f〉を数えてもらい，正確に数えられない方に賭けてみるがいい。ほとんどの人がofの中の〈f〉をいくつか数え忘れるのである。）〈of〉と〈ve〉は両方とも同じ発音パターンを持つが，文法的機能は大きく異なる。「should」のあとの「of」は意味をな

さない，とはいうものの，これはよくあるスペルミスである。見た目のちがいは大きいのでこのエラーは最も簡単に発見されるべきである。再度繰り返すが，エラーの知覚を阻んだのは，あなたが予測と意味づけに強くフォーカスを当てていたためである。

もしこれらのエラーのいくつかに気づかなかったとしたら，あなたは未熟な読み手ではなく，熟達した読み手であるということだ。つまりあなたは意味に集中していたので，これらのエラーによって混乱させられることはなかったのである。効率的な読みとは最小限の努力で意味をつかんでいくことである。

私は6つ目のエラーの説明を残してきた。というのはこれは最も明らかなエラーであると同時に，最も見つけにくいものだからだ。この6つ目のエラーをまだ見つけていないのなら，ここで時間を取って見つけられるまで，またはあきらめるまで再読していただきたい。

どうだろう。見つかっただろうか。まだ見つからないようだったら2行目の最後と3行目の最初に注目していただきたい。theが2回繰り返されている。まるっきり余計な単語が一つ入っているのである。読みというものが，注意深く連続的に単語や文字を認識することだとしたら，なぜこのエラーを見つけるのがそんなに困難だったのだろうか。theが二回続くことは英語の文法上ありえないのであるから，このエラーは最も見つけやすかったはずだ。この二つのtheを見なかったのはあなたの目ではない。脳が，有り得ないこととして拒んだのである。目は脳の道具である。脳は目に，どこを見，なにを捜したらよいかを伝える。脳は目が報告したことから，何に注意を払い，何を用いるかを決定する。脳は人間の情報のプロセス全ての責任を完全に負う。だからあなたの目が繰り返されたtheをインプットした時，あなたの脳は「バカなことをいうな。その情報はすてに受け取っている。」と反応したのだ。

人間の思考は，読みにおいて選択的であるにちがいない。だから利用可能な情報が全てプロセスされるより前に，必要な情報をより速く知覚して決断を下すためのスキーマや手だてを発達させざるを得ない。本を読んでいようと，ゲームで遊んでいようと，或は単に道を歩いているだけでも，我々の生活は，絶え間なく我々に不完全で曖昧な情報を用いながら，入ってくる知識について何らかの決断を下すことを要求している。読みにおいては，我々はまだ知らない事を推理し予測するために，すでに知っていることを用いているのである。

様式と構成を予想すること，そして意味の予想－こちらが殆どの部分を占める－，ということが，読みに関する全てなのである。我々が見たと思ったのは，見たことの一部分であり，そこに自分で期待していたものをより多く見ているのだ。そして期待して見ることは，強い影響力を持っているので，内容を理解することに支障がない限り，自分のミスキュー，著者や出版者のエラーを見逃してしまうのである。或は逆に，それらのミスキューは意味をわかっていく上ではじゃまになるので，先の文章を読んで経験したように，脳はそれを発見するばかりでなく修正していくのである。

あなた自身のここでの経験を確認することは特にユニークなことではない。同じことを友人で実験してみるとよいだろう。多少の違いはあれ，友人の反応もあなたのものに近いことがわかるはずだ。読み手は誰もが，プリントの意味をわかるために同じ手だてを用いる。

フレッド　ゴラッシュは彼の博士論文の中で，先の文章を中学生と大学生のグループに読ませている。それぞれのグループの半数には，エラーを捜すために読むように指示し，あとの半数には意味を捕えるために読むよう指示した。以下はその結果の一部である。

＊制限時間内(この文章を1－3回読むのに十分な時間)で，被験者は，約1／3のエラーを発見した。エラーを見つけるように指示されたグループでは，平均37%のエラーを見つけ，意味を捕えるよう指示されたグループの平均は28%だった。

＊上記のうち，中学生のグループは32%のエラーを見つけ，大学生のグループは42%だった。

この結果は，大学生の方が中学生より適応力があり，

エラーを捜すよう指示された方がそうでないグループより多くエラーを見つけ，そして、半数以上の被験者らにとっては，読んでいることの意味を構成する上でエラーは何ら問題にならなかった，ということを示している。

思い出せることを全て書き下ろしたのち，ゴラッシュは被験者に文章の再読を許し，残りのエラーを捜すために無制限の時間を与えた。それでも中学生では59%，大学生は69%のエラーしか発見できなかった。そして6つのエラーを発見する難易度の順は，両方のグループ，両方の条件において同じだった。あなた自身がこの文章の読みで経験したことは，読みとは単語の認識ではなく意味をわかろうとすることだ，ということを明らかに証明している。

さて次のことを考えていただきたい。あなたは先の文章を読んだ時，主としてその意味に焦点をおき，いくつかのエラーを見落とした。エラーを見落としたのはうまく意味を構成し，内容についての強い予測をもっていたからである。あの文章の読みにおいて，最初から最後まで明らかに同一のプロセスが，読みを支配していた——あなたはエラー以外の単語においてもその一文字一文字を見ていたのではない。単語を予想しながら読んだという事実は，文字や単語の正確さに対するあなたの関心を表わすのではなく，そこに何がくるのかという予測を確認するために，必要なだけの情報を用いることにあなたは優れていたということを示している。

この些細な実験で効果的な読みとは，細部に注意を払うことや正確さを気にするという問題ではないことをあなたは知ったわけである。効果的な読みは意味をわかろうとすることに焦点を保つことであり，他のことは適切な重要性を受け負うにすぎない。

意味と無意味（センスとナンセンス）

読んだことを理解することの重要性について今まで述べてきたが，この本全体を通し，そのことについて私は述べ続けるつもりだ。読み手は文字や単語の全て細部にまで注意を払わずに，文章の意味を理解していることをあなたと私は，共に実証したところだ。だがこのことは，読み手が解明不可能でミステリアスなプロセスを通って意味を構成していると示しているのではない。読みの中で言語は機能的に働いており，我々が意味を構成するのはその言語との対応を通してである。だが言語の中に意味が存在するというのではない。読み手と書き手は言語に意味を運び込まねばならない。その上で言語から意味を構成するのが可能となる。言語は単に，意味を持つ可能性を持っているにすぎない。書き手は自分の頭の中にある意味をうつし出すべく，その意味を持つ可能性を用いて内容を創り出し，読み手は内容をわかるために，そこに意味を運び込む。

次の実験では，意図的に意味を欠損させた文面をわかっていく，ということを試みる。我々読み手が内容を理解するために用いる言語の中に，何があるかを共に探ってみたい。次の物語はきちんとした筋を持つが，内容語（content words）が除かれ，代わりに英語っぽい発音とスペリングをもった無意味な単語（ナンセンス語）が入れられている。英語の文法は文章にパターンを与えるが，ナンセンス語が文法的機能を請け負うことは可能であり，従って意味の潜在力も保たれる。機能語（function words）－内容を結び合わせ，文法的パターンを作り上げる単語－はそのまま維持されているが，それ自体では意味を限定できる手段としてたいして役立つとはいえない。また語形変化，つまり英語の文法がその文法的機能のために単語に用いる語尾変化，そして名詞と動詞も原則として適切な場所に置かれている。

実験方法

＊次の物語を全部通して読む。

＊あとに続く問いに物語の中の単語を用いて答える。

A Mardsan Gilberter for Farfie

Glis was very fraper. She had denarpen Farfie's mardsan. She didn't talp a gilberter for him. So she conlanted to plimp a mardsan binky for him. She had just sparved the binky when he jibbled in the gorger.

"Clorsty mardsan！"she boffed.

"That's a crouistish mardsan binky," boffed Farfie, "but my mardsan is on Stansan. Agsan is Kelsan."

"In that rusper," boffed Glis, "I won't whank you your giberter until Stansan."

訳

FarfieのためのMardsan Gilberter

Glisfはとてもfraperだった。彼女はForfieのmardsanをdenerpしていた。彼女は彼のためにgilberterをtalpしていなかったのだ。そこで彼女はmardsan binkyをplimpすることにconlanteした。彼女がgorgerにjibbleしたとき，彼女はちょうどbinkyをsparveしていた。

「Clorsty mardsan！」彼女はbofした。

「これはcrouistish mardsan binkyだ。」Farfieはbofした。

「でも，ぼくのmardsanはStansanだよ，AgsanはKelsanだ。」

「そのruspenなら，」Glisはbofした。「私はStansanまでgiberterをあなたにwhankしないわ。」

問

1 なぜ，Glis はfraperだったのか？
2 Glisは，何をplimp たのか？
3 Glisがbinkyをsparveしているときgorgerにjibbleしたのは誰か？
4 Farfieはmardsan binkyについて何とbofしたのか？
5 なぜGlisはFarfieに，彼女のgiberterをwhankしなかったのか？

このナンセンス語はとても英語に似ているので，意味がわかるように思える。問題は，あなたが文化的なハンデを負っている，ということだ。つまりあなたには，fraperになる，或はfraperをここで理解するための経験がない。mardsanがdenarpenされたとき何が起こるか，或は，うまいmardsan binkyをplimpする方法をあなたは知らない。そしてもちろん何がmardsan binkyをcrouistishなものにするかを知らなかったら，この文章も物語もわかるのは困難だろう。

総合的にいって，どの言語においても意味と無意味の間に存在するちがいは，ある具体的な読み手がどんな経験の範囲を持ち用語や概念にどの程度精通しているかに関係がある。我々はある意味では誰もが機能上盲目である。私は込み入った契約書を読むのに弁護士をたのむ。そして自分でその困難な文章をわかろうとはせずに，よって偽証罪を犯す！つまり自分の署名欄の上に「私は上記の事柄を読み理解した。」とあるとき，私はうその署名をするのである。また，私に編み物の本を読んで理解しろといわれても困る。

さて，物語のあとの問いに答えられただろうか。

* なぜGlisはfraperしたのか？ これは簡単だ。彼女はForfieのmardsanをdenarpenしていたのだ。
* 2番目の質問，Glisは何をplimpしたのか，も難しくはない。彼女はFarfieのためにmardan binkyをplimpしたのだ。
* 3番目も簡単だ。誰がgorgerにjibbleしたのか？ もちろんFarfieだ。
* Farfieが何とbofしたかは疑う余地がない，「これはcrouistish mardsan binkyだ。」
* 5番目の質問は答えを推論する問題である。「彼女はFarfieのためgiberterをtalpしなかった」というような答えを正解としてよいだろう。「彼女はFarfieにgiberterをwhankしなかった。なぜなら彼のmardisanはStansanだからだ」というていねいな答えはこの物語全体のユーモアを見落としている。文学の中のユーモアを理解するのは，人によっては困難だ。

さて物語の最初の文章にもどろう。ナンセンス語が含まれようと，英語の文章として理解することは容易であろう。Glisが主語で，おそらくは固有名詞であることはおわかりだろう。fraperが形容詞で，Glisについて何かを述べていることもおわかりと思う。この種の文章パターンは英語ではごく一般的である。主語の名詞のあとにbe動詞，そして形容詞という順である。たとえばJohn is handsome,（ジョンはハンサムだ,）The girl was hungry,（その少女は空腹だった,）The car will be expensive,（その車は高価だろう,）などがそのパターンである。

fraperの意味が何であろうと，それがGlisに関係して

いることはおわかりと思う。そして次の文章はsheという代名詞で始まるのでGlisが女性であるとあなたは推測する。ナンセンス語ではなく本物の単語で読んでいるときも，同様な推測をするだろう。内容の結合と文法を使用して，代名詞の指示するものを推測するのである。

次の文章のどの単語が動詞かも，あなたはおわかりだ。denarpenである。このSVO（主語－動詞－目的語）パターンでは，sheが主語，Farfie's mardsanが目的語，denarpenが動詞である。denarpenを動詞と示すのは，

・主語と目的語の間にあるという位置。
・hadという機能語を伴い，そのhadのあとにこの単語が来ていること。
・語尾が-enであるということ。

これらのこと全てに気づいていたかどうかに関わらず，あなたはdenarpenが過去完了の他動詞であることを推測した。またこの動詞の他の形を，きっと確信を持って想像できるであろう。つまり， I denarpe, he denarpes, I am denarping, I denarped, I will denarpe, などだ。あなたはいかによく英語の文法を知り，それを利用しているかおわかりいただけただろう。同様に，その次の文章のtalpについても同様に，talp, talps, talped, talpingを想像できるにちがいない。

またあなたは名詞を言い当てるためにも英語の文法を用いている。たとえばgilberterはaのあとに続いているから名詞である。そしてこの名詞の複数形はgilbertersであり語尾に〈s〉を伴い，発音は/z/であることもおわかりのはずだ。他の単語の複数形の発音は/z/ではなくとも，gilberterの複数形は/z/の発音であることを確信を持って言い当てることができるのはなぜだろうか。答えは単純だ。それはあなたが英語の正字法と音韻組織の関係についての知識を利用しているからだ。/r/という音で終わる単語のあとに〈s〉がつくと，必ず/z/の発音を用いる。だがこれが〈g〉で始まる単語となると，この「綴り」と「発音」の一貫性は崩れてくる。〈i〉の前では〈g〉は「gin（ジン）」のようにやわらかい音だろうか，それとも「give（ギブ）」のようにかたい音だろうか。giberterのアクセントは「gi'-ber-ter」だろうか，それとも「gi-ber'-ter」だろうか。ナンセンス語での文法については確かであっても発音は確かとはいえない。有能な読み手として，あなたはそれぞれのナンセンス語の発音を作り出すことは可能だが，その発音は他の人のものとはちがうかもしれない。そして英語の様々な方言のフォニックスはとても複雑なので，ある一つの発音を「正確」とすることは不可能である。

Mardsanはおもしろい単語である。なぜならFarbie's mardsanのように名詞として，数箇所で使われる他にmardsan binkyのように名詞の修飾語としても使われる。英語の単語は接語的機能を変化させられるが，それは文章のパターンによって示される。We use the garden hose in the garden when we're gardening, などはよい例である。（訳者 注 最初のgardenはホースの修飾語，次のgardenは独立した名詞，３つ目のgardenは動詞である。）

この物語の中で英語文法のパターンは内容に，組織，様式，形といったものを与え，常にあなたを意味へと導く。もしあなたがplimp,mardsan，或は，binkyが何を意味するのか知っていたら，この物語がわかったはずだ。ほんの些細な，一つの意味の小片が残りの全てを理解するのに必要な全てなのである――たとえばどんなmardsanがclostyなものであり，なぜ感嘆符（！）を伴い得るのだろうか。

この実験でわかったことは，読み手は意味を得るために文章のパターンを用いるということだ。このナンセンス語の物語の中で，読み手は意味を得るために必要なものは全て持っているが，なかなか意味へたどり着かないのは，読みへ十分な意味を運び込めないからである。あなたはこの物語の中のアイデアの相互関係を，文法パターンから感じ取ってはいるが，mardsans, Agsans, Kelsans, そしてStansansについての十分な経験がない。ちょっと待て！ 今，パターンを発見したのではないか？ Stansansに？ Stansansまで？ なぜStansanは大文字で始まるのだろう？

いかに読み手が熟練していようと，頭の中に入ってい

ない概念，考え，用語を含んだ書物を読む時，また内容を理解するための背景になる知識が欠けている場合，この実験ようなことが起こる。そんな時，読み手は内容をナンセンスとしてもてあそぶことしかできない。音読せよといわれたら，きっとほどよいイントネーションと発音を作り出し，あたかもその言語をわかっているように読むかもしれない。子供達は学校でこれをよくやっている。小学校高学年の児童や中学生が読めと言われたものを理解するのをあきらめる，というのはよくあることだ。彼らはかなりうまく発音し，読解問題を，あなたがナンセンス語の質問に答えたのと同じ方法でうまく解答を見つけていく。「南極の主要な特徴は何か？」ときかれると，子供達は「南極の主要な特徴は」で始まる文章をさがすためにページを前に戻り，その文章を書き写すのである。正解を得るためには，あなたが「mardsan binky」について知っていること以上に子供達は「南極の主要な特徴」について知っている必要はない。このような質問について，少しでも予備知識を運び込むと，教科書とマッチせず，間違いとして扱われるかもしれない。

つまり重要なのは意味のある言語をあたかもナンセンスであるかのように扱うことが可能だということだ。このことは子供達が自分の経験に関係ある読みものを読む必要性の重要さを語っている。読み手の経験に関係のない不慣れな概念を討論するのに用いられた不慣れな言語は読み手にとってナンセンスである。

このナンセンス物語を大人の聴衆に対して使いはじめた時，私が予期していなかったことが起こり始めた。ほとんど毎回，聴衆の一人か二人はこの物語の意味のあるオリジナルを再構成することができ，常に彼らはどうしてそれが出来たのかわからないのだった。何が起こっていたか，私はわかっているつもりだ。私が先に示したようなパターンは読み手に内容の前後関係を構成するための時間の関連性について情報を与えるので，読み手はオリジナルに近い意味を再構成することが可能なのである。読み手はたった一つか二つのナンセンス語に意味を与えることが出来ると，残りをわかるのはずっと容易になる。この物語の意味があなたにはわかっただろうか。(もう少しヒントを与えよう。Happy Birthday！！)

この実験（6章も参照していただきたい）は我々に読み手は彼らが読んだことを理解するのに3種類の情報を用いていることを語っている。

＊グラフォフォニック（graphophonic）

あなたはナンセンス物語を音読するのに，英語の正字法，スペリング，そして句読法についての知識を用いた。また音韻法，或は音声組織，そして正字法と音韻法がいかに関係しているかーすなわちこれがフォニックスであるーについての知識を用い，容易に英語の発音を作り出すことができた。つまりこれはあなたがグラフォフォニック（文字と音韻関係）を用いて成し得たことである。だがその発音が，具体的なある一つの方言の中でも慣例的な発音であるかどうかを語るすべはない。(ニューイングランド地方では「mardsan」は［mahdsan］と発音されるだろう。）だがナンセンス語を発音できることは，それに意味をもたらすことではないのは明らかである。

＊文法（接語法）

あなたはナンセンス物語の文章に容認可能な英語の文法を割り当てることができた。しかもナンセンス語が話法のどの部分に当たるか（文法上の機能）も知っていた。このことは物語の中で何が起こっているか多くを語ったが，本物の意味を省いてのことだった。ハリデーはこの文法と言い回し（語彙lexicon）の結び付きを「語彙ー文法（lexico-grammar）」という用語で呼んでいる（1975)。

＊意味

3つ目の情報は意味である。あなたは文面から意味を得るためには自分で意味を運びこまなくてはならないことを，今，正に試したところだ。

我々は読んだものをわかるために上記の3つの情報をすべて用いなくてはならない。意味をわかるために，たくさん意味を運んで来れば来るほど，他の情報は少なくてすむ。幸いにしてこのナンセンス物語ほど多くナンセ

ンス語を含んだテキストというものには，お目にかからない－通常は読み手がわからない単語は一つか二つだけである。だが，我々は見慣れた単語が，見慣れない文脈の中でよく知らない意味で使われているのは多く見かける。そしてその内容がおかれている状況と文化的脈略の中でその単語にふさわしい意味を我々は得るのである。

言葉をつかむということ

我々が文脈の中で見慣れない単語にでくわした時，どのようにして読みの語彙を作り上げていくかを知るために３つ目の実験を行う。この実験では「読み手は言葉の意味をどのように獲得するか」という問いを追及しよう。

まず，概念や考えと，それらを言語によって表現する手段とは関係し合っているがこの２つは異なる事柄であるということを考えていただきたい。たとえば

・我々は概念は知っていても，それを表現する具体的な言い回しには不慣れかもしれない。
・我々はその言葉は知っていても，ある特定な使い方については不慣れかもしれない。
・或は，我々は概念も言い回しも両方とも知らないかもしれない。

かつて，私はある教師が５年生の児童にある物語の読解に取り組む前に「新しい言葉の紹介」をするのを参観したことがある。その教師は子供達に「臆病」という言葉の定義をたずねた。何人かの子供達の試みがうまくいかなかったあと，ある児童が本の巻末の用語解説をチェックして教師から褒め言葉を勝ち取った。「危険に面して恐ろしさを表現すること。」その教師はその子供が単語の意味を理解してその定義を述べたと思っていたようだが，私は何人かの子供達が小声で「なんだ弱虫ってことか。」とつぶやき合っているのを聞いた。彼らは「臆病」という概念は持っていたのだがその用語を知らなかったのである。

実験方法

＊あとに続く文章をカバーして文章を一つづつ読む。
＊あなたが立ち止まる度に，「パリ」が何を意味するか決断する。
＊さらに文脈を進むことによって，あなたが決断したこの意味がどのように変化していくかに注目する。

The Pali

Several years ago I saw a pali for the first time. Pali is a Hawaiian word, but everyone in the island state uses it. The first pali I saw was very high. It was a pali near Honolulu which has great historical significance. People in Honolulu call it, simply, "the Pali" On this pali, the first King Kamehameha trapped the army of Oahu and drove his enemies off the Pali to their deaths.

The wind blows so strongly up the face of the Pali that you can hardly approach the edge. A local tale is that one day a despondent lover jumped off the Pali and the wind held him up against the face of the Pali until the firemen could come and rescue him.

パリ（Pali）

数年前，私は初めてパリを見た。パリとは，ハワイ語であり，ハワイ州の人々は誰もがこの言葉を使っている。私が見た最初のパリはとても高かった。それはホノルルの近くのパリで歴史的に重要な意味を持っている。ホノルルの人々はそれを単に，ザ・パリ（the Pali）と呼んでいる。このパリの上で初代王のカメハメハが，オアフの敵軍を追い込み，そこからつき落として敵を死に追いやった。

ザ・パリの断面を嵐がとても強く吹き上げるので，あなたはその端までは行くことができない。この地方にはこのパリにまつわる伝説がある。ある日，失望のどん底にあった恋人がパリから飛び降りたが，消防隊が来てその人を助けるまで，風が強く断面を吹き上げ彼を支えていたのだった。

あなたはこの物語を読み進めるにつれて，パリという言葉とその概念について，どんどん詳しく知るように

なった。そしてあなたが決断したパリの意味はハワイ語が意味するパリへと，どんどん近づいた。その意味は物の名前から場所の名前へと移って行き，さらに何によってパリがパリであるとわかるのか，またホノルルの近くの，ザ・パリについて何が特別であるのかへと移って行ったことだろう。重要なことは，実の場における真実性のある識字事象の中で用いることによって，その単語と概念をあなたは理解するに至ったということだ。

あなたが似たような地層の地域に住んでいるならば，この概念を持ち，意味を得ることが容易であり，別の使い慣れた用語と同一視して考えるであろう。だがあなたがもし，平地に住んでいたら，このテキストに関連する経験が，ほとんどないだろうし，意味を築くのに，より時間がかかるだろう—物語の最後まで読んでも，まだわからないかもしれない。

このプロセス全体をさらに困難にさせるのは，次の文章に行くと前の文章であなたが想像したパリの意味が，違ってくるかもしれないということだ。我々が語彙を築いていくためには実の場で真実性を持つ内容の中で出会った言葉や句を連続的に経験していくことが必要である。もちろん，もしあなたがハワイに住んでいたり，或は住んだことがあったり，ザ・パリや他のパリを訪ねたことがあれば，これを読む前からこの概念と用語は知っていたはずだ。我々は読みを通して意味を築くことは可能だ。だがそれはあなたがパリの端まで歩いて行こうとする時，うなる風の中で学ぶこととは異なっている。

意味へ至るということ

今までのところ，「読みというものは言語の複雑な可変数を操作した，作り物の研究実験用テキストではなく，現実の読み手が，実際の読み物を読んでいるのを観察することによって研究されるべきである」，という私の信念に背いている。エラーがわざとちりばめられたテキスト，ナンセンス語があふれたテキスト，そして語彙をどのように築いていくかをあなた自身観察するためのテキストを検証してきた。少なくとも私の実験用テキストは何がテキストをテキスト足るものにさせるかについての理解の上に堅実に基礎を置いている。だが我々は，やはりトリックのない実際の，本物のテキストというものが必要だ。次の実験では本物の大人向けの短編小説の始めの部分を用いる。あなた自身の読みを見直すことは，真実性を持つテキストを理解する時読み手がどのようなプロセスを用いるかを発見するのに役立つ。

実験方法

＊白紙と鉛筆を用意する。

＊次の段落を一度だけ通して読む。

＊本を閉じ，再読せずに読んだことで思い出せることをすべて書き出す。

＊あなたの書いたものと，読んだものとを比べる。

Poison

It must have been around midnight when I drove home, and as I approached the gates of the bungalow I switched off the head lamps of the car so the beam wouldn't swing in through the window of the side bedroom and wake Harry Pope.

毒

それはおそらく真夜中頃だったにちがいないが，私が家に戻った時，バンガローの門の近くに来たので，車のヘッドランプの光線がサイドベッドルームの窓から流れ込み，ハリー・ポープを起こすことがないようヘッドランプを消したのだった。

私が前に述べた，印刷字体とあなたの手書き（或はコンピューター，タイプライター等）文字の視覚的違いについてはここでは繰り返さない。かわりに次の二つの質問をしよう。あなたの記憶によって書いた話はいくつの文章から成っているだろうか？　著者はいくつの文章を用いているだろうか。著者が物語の最初の部分をたった一文で書いていることにあなたはおどろいただろうか。

これはラオルド・ダールの短編の始まりの部分であるが，彼は読み手の心中に，背景の説明やサスペンスとしての要素を作り上げるのに，たった一文を用いることが有効であると明らかに感じたにちがいない。もしあなた

が一文以上で書いたとしたら原文のどこを区切ったのだろうか。それらの文章は原文の節と一致しているだろうか。全部でどの程度，原文の文章を省いただろうか。いくつの要素をあなたは結合させただろうか。あなたの文は全体として意味が通っているだろうか。それとも話を断片的にしか思い出せなかっただろうか。あなたはかなり考えて書いたのであろうが要旨はつかめただろうか。

さて，この極めて成功をおさめている著述家のダールが，彼のもくろみをうまく執り行ったと仮定して，このオープニングの一連の流れをどのように作っているかを考えていくことにしよう。

まずタイトルはなぜ「毒」の一語なのだろうか。毒がこのミステリーの殺人凶器かもしれないって？ なぜ彼は時間についてから語り始め，しかもそれが詳細ではないのだろうか。「それは真夜中だった。」とも「ダッシュボードの時計は11：58を示していた」ともいえたはずだ。なぜ文章が一人称なのだろうか。この「私」というのは男性だろうか，それとも女性だろうか。この人物はその時一人だったのだろうか。このバンガローの門というのはどこであり，車はどのようにそこに近づけるのだろうか。この運転手とハリー・ポープの関係は一体何であろう。そしてなぜ彼，或は彼女はハリー・ポープを起こすことを避けるためにヘッドランプを消したのだろうか。この運転手は思いやりが深いのか，それとも非情なのか。なぜハリーはフルネームで登場するのか。

国語教師達は読解というものを，著者が意図した詳しい意味を読み取ること，とよく仮定する。だがダールはここでは読者が次へと読み進み，彼らの推理と予測を確かめるのをからかうように，わざと曖昧にしているように思える。そしてダールは，話の結末で読者をあっと言わせることにかけては有名である。

次は何が起こるだろうか。予想は一人一人の読み手が構成する意味如何である。おそらくは深夜であるので，運転手は家に戻ったところであり，ハリー・ポープを起こしたくなかった。だから，彼，或は彼女は静かにバンガローに入り，ベットに入った。とまあこんな具合かって？ まさか！ 今述べたのは，論理的な展開であるが，これでは我々のサスペンス感性を失わせ，この本を投げ出せといわんばかりだ。何か予想もつかないことが次に起こる。ダールは我々を驚かせ，次を読ませようとしているのである。

ここで彼の用いた文法を見てみよう。この一文のなかには6つの節が数えられる。

It must have been around midnight
when I drove home ***and***
as I approached the gates of the bungalow
I switched off the head lamps of the car
so the beam wouldn't
　　swing in through the window of the side bedroom ***and***
　　wake Harry Pope.

それは真夜中頃だったに違いないが
私が家に戻った時
バンガローの門の近くに来たので
車のヘッドランプの光線がサイドベッドルームの窓から流れ込み
ハリー・ポープを起こすことのないよう
ヘッドランプを消したのだった。

最後の2つの節は共通の部分をswingとwakeで共有していることに気づいていただきたい。つまり，so the beam would'tはswing以下とwakeの両方にかかるのである。一つの「n't」が2つの動詞，swingとwakeを否定形にしている。これらの節を結んでいる機能語を私は太字で示した。ハリデーとヘイサンは共通要素の省略と接続語や他の機能語の使用のことを文脈の結合組織の一部と呼んでいる（1976）。それは内容を結び付けているからである。この物語の始まりには，結合の別の工夫がある。droveとapproacchedという動詞は動きを示すために用いられているがcarという単語が出てくるまでそれが車の動きであることを我々は確認するすべがないことに気づいていただきたい。関係ある用語を連鎖的に使用するのも内容の結合を築いていく。

あなたの書いたものが，ダールがもくろんだこれらを，

どれだけ明らかにしているか見ていただきたい。すべての節があるだろうか。そしてダールのものと同様に結合し合っているだろうか。

この段落の2行目の最後に通常ではない構成がある。and asのことである。この物語を読んだ人はおそらくこの段落のこの部分は2つの文章に分けられることを認識しながらandを除外する。ここで一体何がおこっているか説明するのにすこし文法の話をしよう。

andというのは，同じ機能を持った2つの言語要素を結ぶ接続語である。すなわち，2つの動詞，run and play，2つの名詞，Jack and Jill，2つの形容詞，red and blue，2つの副詞，happily and easilyという具合である。andは2つの節を結ぶこともできる。だがその2つは同等な関係でなくてはならず，どちらかに頼るものではならない。これがすなわち，この文章でandが行っていることなのである。問題なのは最初の主節（It must have been around midnight）が従属節（When I drove home）によってandから切り離されるということだ。2番目の主節（I switched off the headlamps of the car）は他の従属節（As I approached the gates of the bungalow）によって，andから切り離されている。さらにその上で，asによって示される従属節は先行する主節よりむしろ，あとに続く主節に従うのをこのasが示している。

andとasは些細な機能語かもしれないが節と節の複雑な関係の間にあって，この長いオープニングの文章を読み手が理解できるよう助けつつ，重要な役目をはたしている。（もしダールがこの文を高校1年の時に書いていたら，きっと教師は余白に「文章が長すぎる」と書いたのではないだろうか。）実際このandは本当に必要かというとそうではない。取り除いてみれば2つのまともな文章ができる。ではなぜ著者はここでandを使ったのだろう。著者は我々読者を物語の中で夢中になるまで息をつかせたくなかったのではないか。

ダールが節を結んだ方法に注意を払った私の目的は，文法の話をするためではない。内容をわかるためには文法的構成と関わらねばならないことを示したかったのだ。この長い一文の意味を構成するのに，あなたは途方にくれたかもしれないが一つ一つの単語の意味はわかったであろう。段落を理解し，理解したことを書き出すためには，文法的な文章の構成に取り組まなくてはならない。あなたは原文より多くの文章を書き出したかもしれないし，節の異なった依存関係や結合を作り出していたかもしれない。或はもちろんこれらの節の関係を見失い，誤った理解をしたかもしれない。ダールが意図した読者の一人としてのあなたに理解できるよう彼は内容をデザインし複雑な文面を書いた。だがダールは，あなたが文面を読んだとき，著者の心になにがあったかを正確に理解できると，初めから望んではいなかった。この数行の中で彼はかなりのことをやってのけている。我々に，時間と場所について，ある程度の感覚を与え，二人の登場人物を紹介し，我々に，その二人の関係についてなぞをいだかせた。つまり次に何が起こるかについて我々の好奇心をそそったのである。

さて次にダールの単語の選択について考えてみよう。あなたの書き下ろしには，何か別の単語に入れ替えたものはなかっただろうか。たとえば「around（付近に）」の代わりに，「about（あたりに）」や「nearly（近くに）」を使わなかっただろうか。ヘッドランプと読んだものの，あなたの経験に基づいてヘッドライトと書かなかっただろうか。名前はハリー・ポープのままか，或はヘリーやマリーにしなかっただろうか。バンガローはコテージ，キャビンハウスなどにしなかっただろうか。

バンガローをいう単語を考えていただきたい。これはあなたにとって何も問題にならなかっただろうか。トロントで聴衆の一人がバンガローは通常一階建てでベッドルームが3つある小さな家のことだと話してくれた。だがトロントの聴衆を当惑させたのは門（gates）だった。彼らにとって，門は小さな家より，敷地としての場所によりふさわしく，車道から遮断された実際の場所を示すように思えるということだった。ある人は，バンガローとは奥に大きな家のある敷地の門番小屋ではないかと言った。ここでおこる疑問とは，バンガローについての

読者の既成概念が，この物語を読む能力とこの話の中でのバンガローを理解することにおいて，どう影響しているかということである。多くの人々が，この段落について書き下ろすとき，この門についての言及を省いていることを私は知っている。

もし，あなたが書き下ろしたものに，バンガローがきちんと書かれていても，それはここで意味するバンガローを正しく理解していたことの証拠になるだろうか。もしあなたがその単語を除外していたり何か他の語に入れ替えていたとしたら，バンガローを全くわかっていなかったということを意味するのだろうか。答えはどちらともノーである。正確さとは概念の十分な理解のことを意味するわけではないし，正確さを欠くという事は概念理解が不十分だと意味するわけでもない。この物語全体を何百回も読み，私はこの物語の中で使われているバンガローをかなり完璧に理解したつもりだった。バンガローはインドの言葉であり，インドではバンガローは北アメリカのものよりずっと大きな家を示す。物語を読んで行くと，このバンガローにはベランダがあり，そこへ続く階段があることがわかってくる。だがこの物語におけるバンガローの意味の重要さについて私が認識したのはインドから来た大学院生がこの物語の時代のバンガローとは英国入植者の役人の豪華な邸宅を指すと話してくれた時だった。

というわけで，本物の読み物を用いたこの実験から我々は読みについて何を学んだのだろうか。以下の3つのことが挙げられる。

＊読み手は意味にフォーカスを据える。文面をわかろうと試みることはすべてのプロセスを操作する。

＊明らかに読み手は言語の構造―つまり言語の組織，或は文法―を用いる。これは節同士の関係をひもとくことによって，意味を得るためである。これは実生活で我々が手にするどんな読み物においても真実である。組織抜きでは記号（言語）は意味をなさない。

＊正確さというのは読解の深さを測るには弱く，あてにならない。実際，正確さについて必要以上に気づかうことは，読解のさまたげになる。

この最後の実験であなたが行った事とは3種類の情報の利用である―意味からの情報（意味），語彙文法からの情報（接語法と言い回し），そしてグラフォフォニックからの情報（文字のパターンと，文字と音声との関係）。これらは書き手の文面を読むためであり，あなたが読み手としての個人的な内容を構成するためである。著者（書き手）とあなた（読み手）の双方がともに，このプロセスをうまく成しとげたとき，あなたは読んだものを理解するのである。だが思い出していただきたい―ここが重要なポイントだ―文面の意味について，読み手と書き手の間に完全な一致というものはありえない。

総括

これらの実験を通して，あなたは自分自身の読みのプロセスについて検証した。あなたは効率的（最小限の時間，エネルギー，視覚入力で，意味を捕えること）であり続ける一方で，（意味をうまく構成していくことによって）どのようにその効率性を達成するかを見い出した。読みとは，文字や単語の連続的な認識が成しえたことより，はるかに効率的なプロセスであることが，おわかりいただけたと思う。またプリントの意味をわかっていく中で，あなたの意識はいかに活動的であるかも発見されたことだろう。

だが，あなたは大人の熟練した読み手だ。未熟な読み手に対しても，同様な事が言えるだろか。この疑問を次の章で追っていくとしよう。

編集部注

(1) 本論文はKen Goodman著“On Reading”（Scholastic Canada Ltd. 発行，1996年）の一部を翻訳したもので，本誌第43巻第1号41ページから続くものである。

(2) 日本読書学会は，Ken Goodman博士とScholasic Canada Ltd. が翻訳掲載の許可を与えられた事に対し感謝の意を表する。

日本読書学会会則（1989年７月改正）

第１章　名称と事務所

第１条　本会は日本読書学会と称する。

第２条　本会の事務局は当分の間筑波大学学校教育部国語教育研究室内に置く。

第２章　目的と事業

第３条　本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第４条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

１．会員の研究促進を目的とする大会の開催。
２．会員の共同研究を目的とする部会の開催。
３．会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
４．読書及びその指導に関する内外諸文献の調査ならびにその紹介。
５．内外における関係諸団体との緊密な連絡。
６．会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
７．会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
８．その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第３章　組織と運営

第５条　本会の会員は正会員，名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み，常任理事会の承認を得，所定の会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの，または本会の事業に財政的援助をしたもので，理事会が推薦したものとする。名誉会員は正会員と同等の権利を有する。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して，賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り，または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第６条　会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布をうけることができる。

第７条　本会の事業を運営するために次の役員を置く。

１．会　　長　　１　名
２．副 会 長　　１　名
３．常任理事　　若干名
４．理　　事　　若干名
５．監　　事　　２　名

第８条　理事及び監事は，正会員および名誉会員が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前記の互選によるもののほか，正会員の内若干名を指名して，理事に加えることができる。

第９条　理事は理事会を構成し，本会の事業執行の責任を負う。

第10条　副理事長は理事の互選により選出し，理事長の任期終了とともに次期理事長となる。

理事長は会長として本会を代表する。副理事長は副会長として会長を補佐し，会長事故あるときは，その職務を代行する。

第11条　常任理事は理事が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前項の互選によるもののほか，理事の内２名に限り指名して，理事会の承認を経て，常任理事に加えることができる。

常任理事会は理事長，副理事長及び常任理事によって構成する。

常任理事会は理事長の委託をうけ，本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条　監事は，本会の会計を監査する。

第13条　役員の任期は３年とし，４月１日から３年後の３月31日までとする。新役員は，旧役員の任期が最終となる年度内に，選挙によって決定する。

第14条　本会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は理事会の推戴による。

第15条　本会の事業を遂行するために事務局に次の職員を置く。

１．事務局長　　１　名
２．書　　記　　若干名

事務局職員に関する規定は別に定める。

第16条　本会に支部を置くことができる。支部に関する規定はこれを別に定める。

第４章　会　　計

第17条　本会の経費は会費，賛助会費，寄附金または補助金等によって支弁する。

第18条　会費は当分の間年額7,000円とし，毎年３月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

第19条　本会の会計年度は毎年４月１日より始まり翌年３月31日で終わる。決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第５章　雑　　則

第20条　本会の会則の改正は総会において審議決定される。

Vol. 43, No. 2 July, 1999

THE SCIENCE OF READING

Published by **The Japan Reading Association**

President: Takashi Kuwabara **President-elect**: Hajime Narushima

EDITORS

Shinichi Ikeda	Mamoru Kaneko	Takahiko Sakamoto	Yasuhiko Tsukada
Hajime Narushima	Katsumi Tokuda	James M. Furukawa	Donald A. Leton

EDITORIAL ADVISORS

Shuntaro Arisawa	Toshimichi Ishihara	Yasuchika Imai	Nobuko Uchida
Takashi Ezure	Yoshitake Oshiro	Michio Onishi	Akira Okada
Norihiko Kitao	Keiko Kuhara-Kojima	Soichi Goto	Kunio Kobayashi
Nobuyoshi Shikanai	Kazuko Takagi	Genichiro Fukawa	Mariko Murai
Shozo Muraishi	Yoshitsugu Mochizuki	Jun Yamada	Hideo Yorozuya

CONTENTS

Original Articles

On theoretical approaches to the teaching of literature in high schools in the late Meiji Era: Based chiefly on data from contemporary educational magazines ……UKIDA, Mayumi ……43

The effect of training on reading rate ……YAMAMOTO, Tetsuya, SATO, Yausmasa, KIRIHARA, Hiroyuki ……51

A table of Katakana bigram frequencies of Japanese 4-letter Katakana words ……KAWAKAMI, Masahiro……56

Translation

On reading (3) ……GOODMAN, Ken, YOKOTA, Rayco (Translator)……66

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Takahiko Sakamoto, Japan Reading Association, Department of Japanese Language Education, School Education Center, University of Tsukuba, 3-29-1 Otsuka, Bunkyo, Tokyo 112-0012, Japan.

第43巻 第2号

〈通巻 第 168 号〉

平成11年7月1日 発行

会員頒布

編 集 日本読書学会編集委員会

発 行 人 日 本 読 書 学 会

発 行 所 日 本 読 書 学 会

〒 112—0012 東京都文京区大塚 3 －29－ 1 筑波大学学校教育部国語教育研究室内 振替00160-8-3213番

印刷・勝美印刷株式会社

平成十一年七月一日発行（年四回発行）